

野外活動のための 安心・安全講座 3

SCOUTING

スカウティング誌掲載記事

[2021年5月号～2024年3月号 抜粋]



目次

2021年(令和3年)	
7月号	東日本大震災10年～地震列島日本に暮らす～ …… 03
9月号	「自分だけは大丈夫」と思っていませんか？～正常性バイアスと事故・災害～ …… 04
11月号	ご存知ですか？救急箱の新常識～お互いを守るための提案～ …… 05
2022年(令和4年)	
1月号	え！いけないの？「お薬あるある」NG事例 …… 06
3月号	本当にそれでいいのかな？～計画書作成、下見実施、保険加入のあるある～ …… 07
7月号	夏季の諸活動への配慮 …… 08
9月号	「そなえよつねに共済」とは？ …… 09
11月号	久しぶりの冬場の活動は事故にご注意！ …… 10
2023年(令和5年)	
1月号	油断しないで！自転車で加害事故を起こしてしまったら… …… 11
3月号	安全な自転車利用のために… …… 12
7月号	これからのスカウト活動での配慮 …… 13
	自転車および電動キックボードを安全に利用するために… …… 14
9月号	気象予報と安全 — その空は世界と繋がっている… …… 15
11月号	スマホの影響 …… 16
2024年(令和6年)	
1月号	日本列島と地震～災害は想像を超えてやってくる～ …… 17
3月号	賠償責任保険と安全 …… 18

そなえよつねに共済 事故データ分析

2021年(令和3年)	5月号	2019(令和元)年度 …… 20
2022年(令和4年)	5月号	2020(令和2)年度 …… 22
2023年(令和5年)	5月号	2021(令和3)年度 …… 24

※この冊子は、ボーイスカウト日本連盟ホームページに掲載しています

東日本大震災10年 ～地震列島日本に暮らす～

1. はじめに

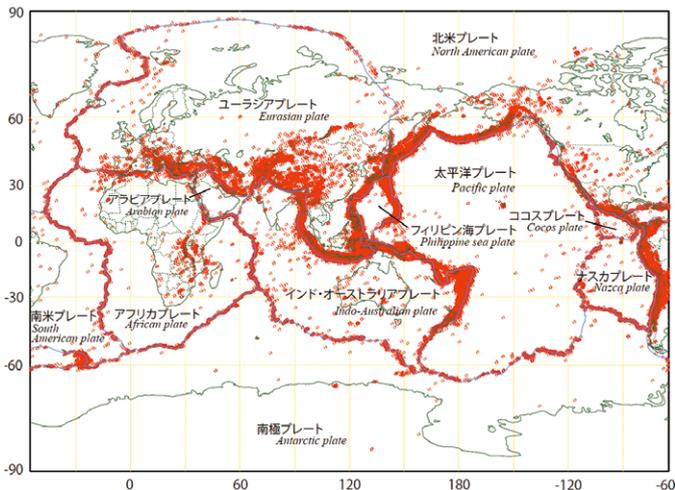
私たちは地震大国といわれる日本に住んでいます。小さな地震は日常的に経験しているためか「あ、また地震か」「この間の地震より小さいから大丈夫だな」などとやり過ごしてしまう傾向があります。これは人間の心もつ特性で、無意識に都合のよい情報だけを見てしまったり現実を過小評価して、安心を得ようとするもので「正常性バイアス」と呼ばれます。

東日本大震災では、巨大な津波を伴い、15,899人が亡くなり、2,526人が現在も行方不明です(2021年3月)。また、これまでの10年間に死者が出た地震は10回にのぼります。

大丈夫だろうという感覚だけでは絶対に対応できない地震や津波の脅威についての十分な知識と防災のスキルをもつことが不可欠です。

2. 地震や津波の脅威

中学校や高校で学習したと思いますが、日本付近は海のプレートである太平洋プレート、フィリピン海プレートが、陸のプレートである北米プレートとユーラシアプレートに向かって数cm/年の速度で動いており、陸のプレートの下に沈み込んでいます。そのため、日本周辺では複雑な力



出展：気象庁ホームページ「世界の主なプレートと地震の分布」
https://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/jishin/about_eq.html

がかかり、世界でも有数の地震大国となっているのです。東日本大震災では日本海溝に沈み込む海のプレートに引きずられた陸のプレートが反発して、大地震と大津波を引き起こしました。2016年の熊本地震は、陸のプレートの内部に力が加わり、断層が動いて発生した地震です。

地震で最も怖いのは津波の被害です。東日本大震災では14時46分の地震発生後、14時49分に津波警報が出され、宮城県石巻市で30分後、岩手県宮古市で32分後に3mの津波を観測しています。その後、7～8mの巨大津波になるまでわずか5分程度しかかかりませんでした。1983年5月の日本海中部地震では秋田県男鹿市の海岸を遠方で訪れた小学生13人が地震による津波に飲み込まれ命を落としています。地震発生が11時59分。そのわずか9分後には津波が到達しています。

海の近くに生活している人たちは、常に地震と津波を考えながら生活し、また避難訓練等も頻繁に行っています。しかし、都市部や内陸部に住んでいる人たちは、「地震＝津波」と即座に考えることができるでしょうか。もし、隊活動で潮干狩りに出かけていたら、海沿いの道をサイクリングしていたら、海辺のキャンプ場でキャンプしていたら……。安全計画に地震発生を想定した対応が考えられていますか。避難路を確認していますか。危険は海の近くだけではありません。山間部では斜面崩落や落石が、都市部ではビルの倒壊や落下物の危険が考えられます。

3. スカウトスキルを活かして

「このくらいの地震なら大丈夫」と思いたい、その数分間の時間のロスが避難の遅れにつながり、取り返しのつかない事態に陥ってしまうかもしれません。その教訓は、これまでの多くの地震災害で示されています。「地震が起きたら急いで高台へ避難する」という訓練を重ねていた小中学校で、その訓練に基づく行動が多くの人命を救った例がありました。

守るべきは自分とスカウトたちの命です。最初の一撃を避けることができれば、これまで身につけたスカウトスキルが命をつなぐのに役立ってくれます。ロープ結び、野営技能、野外料理の技、山野草の知識、水を浄化する方法など、これまでスカウト活動で取り組んだことがよみがえってくるはず。ですから、活動中に地震が起きたら、まず身を守ることを第一に考えて行動できるよう、日々のスカウト活動で意識的に取り組んでいくことが重要です。

■ 東日本大震災以降の死者の出た地震

年月	震央地名	M	人的被害	物的被害
2021年2月13日	福島県沖	7.3	死1、負傷187	全壊69、半壊729、損壊19,758
2018年9月6日	胆振地方中東部	6.7	死43、負傷782	全壊469、半壊1,660、損壊13,849
2018年6月18日	大阪府北部	6.1	死6、負傷462	全壊21、半壊483、損壊61,266
2016年4月14日～	熊本県熊本地方など	7.3	死273、負傷2,809	全壊8,667、半壊34,719、損壊162,500
2012年12月7日	三陸沖	7.3	死1、負傷15	損壊1
2012年3月14日	千葉県東方沖	6.1	死1、負傷1	損壊3
2011年6月30日	長野県中部	5.4	死1、負傷17	半壊24、損壊6,117
2011年4月11日	福島県浜通り	7.0	死4、負傷10	※東日本大震災に含める
2011年4月7日	宮城県沖	7.2	死4、負傷296	※東日本大震災に含める
2011年3月12日	長野・新潟県境	6.7	死3、負傷57	全壊73、半壊427

気象庁「日本付近で発生した主な被害地震(平成18年～平成27年)および(平成28年以降)」
<https://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/higai/higai1996-new.html>を加工して作成

「セーフ・フロム・ハーム」・安全委員会

お詫びと訂正／本誌発行版からWEBサイト掲載版における修正

本誌発行時、岩手県釜石市と宮城県石巻市とを誤って記載しておりました。多くの方々には不快な思いをおかけしましたことに、深くお詫びを申し上げます。また、当該の本文末尾9行目の表現が適切ではないとご指摘をいただき、それを改めました。今後このようなことのないよう、原稿執筆陣、編集担当者ともども連携を深め、記事記載内容の確認体制を改めてまいります。

「自分だけは大丈夫」と思っていませんか？ ～正常性バイアスと事故・災害～

1. はじめに

スカウト活動を行う際は、「あらかじめよく考えておく」、すなわち事故につながる場面を想定した準備を行うことが安全対策として重要です。また、これまで『野外活動のための安心・安全講座』に掲載された事故の事例を参考に、事故が起こった場合の対応策、ルールを考えておくことも重要です。スカウト活動に限らず、日常生活の多くの場面で、事故や災害に遭遇した場合を想定して避難訓練などの安全対策や避難指針などの対応策、ルールが策定されています。そのような状況にも拘らず、災害の規模が大きくなってしまふことがあります。それはなぜでしょう？

2. 心のメカニズム（無視と過小評価）

「正常性バイアス」という言葉をご存知でしょうか？ バイアス (bias) とは、傾向、偏向、先入観、データの偏り、思い込み要因、情報の偏りによる認識の歪みを意味します。例えば、全国の世論調査を行う場合に、ある地域の、ある特定の年代に対してだけ調査を行うようなことがあれば、本来の結果から偏った結果になってしまいます。このような場合のデータ（調査）の偏りをバイアスと呼んでいます。「正常性バイアス」とは心理学の用語で、人間の判断や認知、意思決定における恣意的なバイアスの一つで、自分に都合の悪い情報を無視したり、それを過小評価したりしてしまう心理的な特性を指します。事故や災害が起きた際に、「ありえない」、「自分（たち）は大丈夫」、「今回は大丈夫」、「まだ大丈夫」と考えることが「正常性バイアス」といわれています。過剰に反応してパニックにならないための心のメカニズムで、人間の心のある程度まで平穏に保つために必要な反応ですが、度がすぎると、回避行動や避難行動の遅れにつながる事が指摘されています。

普段のスカウト活動では、新しいプログラムよりも、これまでに何度も取り組んでいる慣れたプログラムの方が「正常性バイアス」に入り込みやすいかもしれません。何度も実施しているので事故など「ありえない」、慣れたプログラムなので「自分（たち）は大丈夫」、これまで何も起こらなかったで「大丈夫」。危険な場面に遭遇しても、とっさに回避行動を取れるくらいまでになっていれば良いのですが、そうでなければ「正常性バイアス」によって対応が遅れることがあるかもしれません。

3. 日頃の訓練の大切さ（やはり、そなえよつねに）

令和3年5月20日に災害対策基本法が改正され、災害時における円滑かつ迅速な避難の確保を図る趣旨から、自治体が発令する避難情報が増えられました。これまで災害発生情報、避難指示、避難勧告、避難準備などさまざまな情報で災害の警戒を知らせていましたが、近年の大雨・集中豪雨に伴う大規模災害において、避難勧告のタイミングで避難せず、逃げ遅れにより被災する者が多数発生したり、避難勧告と避難指示の違いが、十分に理解されていなかったことの反省に基づくものです。5月20日からは、緊急安全確保、避難指示、高齢者等避難などの具体的な指示となり、避難指示では該当地域のすべての人が避難することになります。

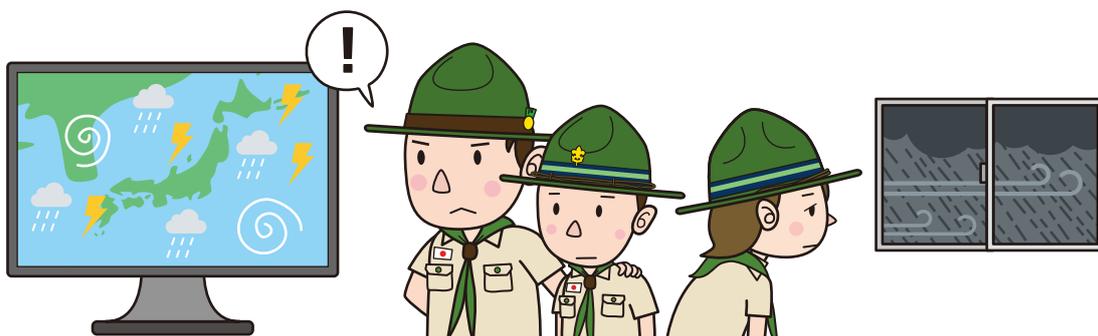
今回の改正で災害が減少することを期待するばかりですが、「正常性バイアス」の働きは考慮しておかなくてはなりません。これまでそんな災害には遭遇していないので「ありえない」、「大丈夫」。そんな考えが避難の遅れにつながったと考えられる災害の事例はこれまでもたくさんあります。野外活動、特に不慣れな場所での活動の際には注意が必要です。「正常性バイアス」に陥らないためにも、日頃の訓練、そなえよつねに、が重要です。



出展：新たな避難情報に関するポスター・チラシ（内閣府）

http://www.bousai.go.jp/oukyu/hinanjouhou/r3_hinanjouhou_guideline/pdf/poster.pdf

「セーフ・フロム・ハーム」・安全委員会



ご存知ですか？ 救急箱の新常識

～お互いを守るための提案～

- 1 救急箱に薬は入れません
- 2 傷口の消毒はしません
- 3 薬は各自で用意します

1. 救急箱に薬は入れません

救急箱といえば酔い止めや痛み止め、消毒液など、さまざまな薬が入っているイメージがあるかもしれませんが、しかし、『安全ハンドブック』（2021年4月発行）に記載があるとおり、指導者はスカウトに薬を与えないことになっています。ですから、スカウト活動用の救急箱に薬を入れておくことは間違いのもとになります。では、団や隊で用意しておく救急用品には、どんなものがあるのか？ 持ち歩ける程度の内容をリストアップしてみます。

2. 傷口の消毒はしません

消毒は皮膚の細胞を傷つけてしまうため、今は行わないのが一般的です。擦り傷や切り傷はきれいな流水でよく洗い、傷口が乾かないようラップを巻き、テープや包帯などで止めます（湿潤療法）。傷の治りが早く、跡も残りにくくなりますが、異物が残っていると化膿して逆効果になりますので、綿棒を使用するなどして、しっかり洗浄するよう心掛けてください。翌日、良くなっていなかったり、悪化している場合は医療機関の受診が推奨されます。また、傷が深い場合や汚染が著しい場合は、破傷風の危険性もあり、抗生物質の投与が必要になることもありますので、早急に医療機関を受診してください。

3. 薬は各自で用意します

救急箱には薬の用意がないことを、保護者会などであらかじめお知らせしましょう。必要な薬はご家庭で用意していただくため、活動場所や季節により用意すべき薬の情報を伝えます。下見や事前の調査で検討し、安全対策に盛り込み、持ち物として提示しましょう。ただし、初めて使う薬は思わぬ副作用が起こる可能性もあります。一度少し使ってみて、かぶれなどを起こさないかチェックしてから持参してもらうのがよいでしょう。

指導者はスカウトが持参した処方薬を、保護者の依頼に基づき「介助」すること（安全ハンドブック P149 参照）、はできますので、薬の携行が必要なスカウトとは、保護者も含めて事前によく話し合い、緊急時の対応等を確認しておくことが必要です。

救 急 箱	
救急用品	使用方法など
はさみ	持ちやすく、先が丸く尖っていないもの
トゲ抜き	トゲ抜きは本人が行う
ポイズンリムーバー	蜂に刺されたときに毒素を吸引する器具。先端に体液がつくので使用後は消毒綿で拭く。口をあてて毒素を吸い出しはけない
体温計	非接触型がよい。電池切れに注意
救急絆創膏	小さい傷に。大小あると便利
ラップ 15cm サイズ (またはドレッシング材各サイズ)	大きな擦り傷を乾かないようにする。火傷を保護する
滅菌ガーゼ	傷口を保護するため。各種サイズ個包装のものを推奨
サージカルテープ	ガーゼ、ラップを止める。紙テープよりかぶれにくく切りやすい
伸縮包帯・ネット包帯	ガーゼ、ラップを固定する、傷口を保護する
三角巾	患部の固定や保護に。使い方をしっかり学んでおく
ビニール手袋	感染を防ぐため、出血時の処置の際には必ず着用する
保冷剤・氷嚢・冷却シート	熱中症対策、打撲などに。ビニール袋に氷を入れて代用可
メモ帳、ペン類	救急処置は処置の記録を残すことが重要（いつ、どんな処置）

※ 年齢や活動内容により、怪我のタイプも違いますので、各隊や団の状況に合わせて種類や数量を検討してください。

※ 救急箱はいつも万全の備えが必要です。キャンプの前や年度初めには、必ずチェックしましょう。

え！いけないの？「お薬あるある」NG 事例

活動中に具合が悪くなってしまったスカウトを、なんとか元気にしてあげたい。そんな優しい気持ちが、かえって副作用を引き起こすことになってしまう場合もあります。前号に続き、今号も「救急箱」をテーマに、薬に関する事例をもとに対応を考えてみましょう。

救 急 箱			
+			
	NG 事例	NG 理由	対応例
事例 1	スキーの後、スカウトが「ふくらはぎが痛い」と言いに来た。指導者自身が整形外科でもらっている湿布を貼ってあげた。	医師から処方される薬は、医師がその人の症状に適切であると判断して選んでいます。自分と似た症状だからとか、たかが湿布と安易に考えてはいけません。湿布にも副作用が起こる可能性があります。	冷やす必要がある場合は、氷嚢や冷却シートを用います。腫れや痛みが著しい場合は、医療機関を受診します。
事例 2	「生理痛でお腹が痛い」と、お腹を抱えて座り込むスカウトに、指導者が持参した生理痛の薬（解熱鎮痛薬）を飲ませた。	市販の解熱鎮痛薬には、眠気やふらつきをおこす成分を含むものがあります。喘息発作や胃痛などの副作用が起きる場合もありますので、本人が飲み慣れているもの以外は、飲ませるべきではありません。	静かなところで休ませます。必要な薬は、各自飲み慣れたものを用意するよう、日ごろから保護者に伝えておきましょう。
事例 3	「目にゴミが入った」と目をごするスカウトに、指導者が持参した花粉症の目薬を点眼した。	目薬の先端にまつ毛などが触れることにより、目薬そのものが菌に汚染されてしまうことがあります。他人の目薬を使うことで、目の病気がうつることもありますので、絶対に共有しないでください。	流水で洗います。異物感がなくならない場合は、眼科を受診します。
事例 4	「虫に刺されてかゆい」と訴えてきたスカウトに、指導者が以前皮膚科でもらった、よく効く塗り薬を塗ってあげた。	皮膚科でもらう塗り薬は、非常に強い効果のあるものからマイルドなものまでさまざまです。皮膚の状態も個人差があり、年齢や部位によっても薬の効き具合が異なります。専門家の判断なく、適当に塗ってはいけません。	冷やすことでも痒みはやわらぎます。著しく腫れたり、痛んだり、広範囲な場合は、皮膚科を受診します。虫よけ剤や虫刺されの薬は、各自用意します。

薬には〈主作用：病気が治る・症状が軽くなる〉と〈副作用：本来の目的以外の好ましくない症状が出る〉という2つの面があります。特に副作用は、人によって表れ方が全く異なるため、自分にとっては苦痛を取り除いてくれる良い薬でも、別の人にとっては副作用を引き起こす怖い薬である場合もあるのです。安心・安全な活動のために、『薬は各自で用意する』ということを浸透させていきましょう。

本当にそれでいいのかな？

～計画書作成、下見実施、保険加入のあるある～

スカウト活動において、私たちは安全について特に注意を払い、計画書の作成や下見、保険加入など、さまざまな対策に努めています。しかしながら、慣れや忙しさから、その本質をつい忘れてしまうようなことはありませんか。

今号では、指導者に起こり得る「あるある」を事例に、自分の行動を振り返って考えてみましょう。

安全計画書あるある ～ビーバー隊の隊集会にて～

- 団委員長** 「入隊式後初めての集会だから、ちょっと見に来ました。活動にもってこいの場所ですが、いくつか危なそうなところがあるようですね。安全計画書はどうなっていたかな？ 隊長、ちょっと見せてもらえますか？」
- 隊長** 「あっ…… 車の中に置いたままです。副長、ちょっと見せてくれるかな」
- 副長** 「私はリーダー会議を欠席したので、計画書をもらっていません」

✓ **安全計画書は「作ること」が目的になっていませんか？
作ること「安心」していませんか？**



計画書作成の際、プログラムを実施するうえで想定される危険やリスク（やけど、溺れる、熱中症等）を把握し、その対処法（事前準備、監視、救命具の準備、水分補給等）を検討します。そうすることで、計画書の作成過程で、プログラム上の安全対策を立てることができます。

また、計画書で情報を共有し、指導者会議や団会議等でチェックを重ねることで、より充実した安全対策ができます。

下見あるある ～カブ隊のリーダー集会にて～

- 隊長** 「8月の隊集会はキャンプですが、場所は〇〇山キャンプ場で決まりですね」
- D L 1** 「あのキャンプ場は、いい場所だと聞いています。さっそく下見ですね」
- D L 2** 「私、そこにはよく行くのですが、近くに美味しいパスタのお店があるんですよ」
- 副長** 「じゃあ、早めに出かけて、打ち合わせを兼ねてランチでもしましょうよ」
- 隊長** 「日程は来週の日曜日でどうでしょう？」
- D L 1** 「その日なら行けます」
- D L 2** 「私もその日は大丈夫です」

✓ **下見は「行くこと」が目的になっていませんか？**



安全に活動するためには、原則として下見が必要です。活動場所を実際に確認することで、具体的な安全対策ができます。

裁判例では、下見は「危険発生に関する未知ないし不確定要素を把握して取り除く」ものとされています。下見をすることで具体的な危険を予測し、その危険を除去することが求められます。

保険あるある ～団会議でのボーイ隊長の報告にて～

- 隊長** 「今、お配りしたのが、ボーイ隊の夏キャンプの計画書です」
- 団委員長** 「スカウトがチャレンジしがいのある、冒険的なプログラムですね。ただ、この活動は事故も起こりやすそうだし、保険の対象にはならないのでは？」
- 隊長** 「『そなえよつねに共済』の手引きを見たら、適用されるみたいです」
- 団委員長** 「それなら安心ですね!!」

✓ **保険に入っていたら「安心」で終わっていませんか？**



どんなによい活動でも、事故が起こってしまえば最悪の活動になってしまいます。指導者は、活動において第一にスカウトの安全を確保しなければなりません。

安全を確保するためには、日ごろから知識と技能、安全に向けた態度を持ち合わせておくことが大切です。

参考書籍 / 「安全ハンドブック ～ダイナミックなスカウティングのために～」(2021年4月発行)

「安全計画書」「下見」「保険」は、どれも安全を確保するうえで大切で欠かせませんが、上記のように、それぞれ「作成」「行くこと」「加入」自体が目的になってはいませんか？

スカウトが「安全」に、指導者が「安心」して活動するために、それぞれの本当の意味を再確認してみましょう。

夏季の諸活動への配慮

いよいよ夏本番！コロナ禍で活動が思うようにできなったり、キャンプは久しぶり、といった団や隊もあるのではないのでしょうか。近年では、ゲリラ豪雨、猛暑といった自然との向き合い方にもさまざまな「そなえ」が必要となっています。また、この2年間で学校の行事や活動も自粛されており、スカウトたちの体力への配慮についても今一度、それぞれの団や隊で確認し合しましょう。

Q 久々に長期キャンプを行います。指導者として気を付けるポイントを教えてください。

夏場の活動でも、夜間に屋外で過ごす場合など、気温がどのように変化するかを事前にスカウト自身に調べさせることが大切です。

気温の変化は身体に大きな影響を与えます。一般的に、一日の中の気温差（日較差）や日ご



との気温差が8℃を超えると、体調に変化をきたす人が出始めると言われます。多くの人に経験があると思いますが、真夏の極度に暑い日より、梅雨の終わりや秋口に差し掛かるときに気温差は大きくなりやすいです。また、標高が高く緑に囲まれた場所のほうが朝晩の気温が下がりやすく、さらに差は大きくなります。8℃の差は、半袖シャツが心地よい温度帯から、上着などを羽織りたくなるくらいに下がるほどの変化です。

気象庁 週間予報 <https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>

Q 長年ボーイ隊指導者をやっています。最新の気象にかかわるトレンドをおしえてください。

観測・予測や通信技術の発達により、近年、災害を未然に防ぐための新しい情報発信の仕組みが次々と生まれてきています。そのことを学び、安全を確保することも指導者の努めです。今回は、とくに人命にも関わる「線状降水帯予測」「熱中症警戒アラート／暑さ指数」をご紹介します。

1 「線状降水帯予測」

発達した積乱雲が列をなし、次から次へと流れ込むことによって大雨になり、災害をもたらすことがあります。その原因である「線状降水帯」の発生を予想する情報が、今年の6月1日から発表されるようになりました。この「線状降水帯予測」という情報は、「関東甲信」「東海」など、全国を11に分けた地域ごとに、その現象が起きるおおよそ半日前に発表されます。深夜の大雨災害が発生しそうな時に避難すべきかどうかの判断に有効だと言われています。

2 「熱中症警戒アラート／暑さ指数」

そもそも、人が感じる「暑さ」は気温だけでなく、湿度にも大きく影響されます。それらを総合して熱中症リスクの高まりに注意を呼びかけるのがこの情報です。暑さ指数「33」以上が予想される時に「熱中症警戒アラート」が発表されます。発表されるタイミングは、前日の17時頃ごろと当日朝5時ごろの2回。ただ、この「アラート」が発表されるほどでなくても、暑さ指数28の「嚴重警戒」以上となることが予想される場合は、体温が上がりやすい活動は避けるべきです。

気象庁 熱中症警戒アラート <https://www.jma.go.jp/bosai/information/heat.html>
環境省 熱中症予防情報サイト <https://www.wbgt.env.go.jp/>

Q カブ隊指導者です。天気に興味を持ってもらうプログラムを企画しています。スカウトが面白く参加できるようなヒントってありますか？

「正確な情報を早く掴む」ことよりも「危ないと感じる感覚を養うこと」のほうが、気象災害から身を守るためには大切です。

雨の降り方を、その音で感じる。土や緑の匂いの変化で、雨の訪れや土砂災害の予兆を掴む・自然は、実はいろんな「サイン」を与えてくれています。そのようなサインに気づくことができるようになるのは、野外活動中の災害から身を守るために大切な方法のひとつです。

例えば、乾いた表面の土と、掘り返した湿った土の匂いの差を比べてみるなど、カブスカウトでも楽しめるゲームになると思います。



野外での活動を安全に成し遂げるのは、指導者として基本的な責務です。その真髄は、実は自然と真正面から向き合うことにほかならず、その知識・感覚を養うことで、日々の何気ない風景もぐっと彩りを帯びて感じられるようになるものと思われれます。楽しい夏を迎えるその前に、ぜひ「野外での安全な活動のために大切なこと」に目を向けていただければ幸いです。

キャンプ中に湿度計を配置するのに適した場所は？

- ① 日陰で涼しい、食堂フライの下
- ② いつでも確認できるように、集会広場
- ③ 隊長が見るものだから、隊長のテントの中
- ④ 忘れちゃうから、救急箱の中

正解は…① 日陰で涼しい、食堂フライの中

多くの人が活動する場所を測ることが基本です。ただ、広い屋外に設置すると測器が直射日光を浴びてしまい、正確に測ることができません。直射日光を避けながら、風通しの良い場所を選ぶことが大切です。

湿度計選びにおすすめなのは、温度計の機能も持ち合わせた「温湿度計」です。これによって、気温はそれほど高くなくてもムシムシと湿度が高くて体感的に暑さを感じる日の温度や湿度を具体的な値として知ることができます。

「そなえよつねに共済」とは？

“ボーイスカウト活動”中のケガを補償する仕組みとして、2013年に文部科学省より認可された「そなえよつねに共済」。この制度は、冒険的で魅力的なスカウト活動を確保するために欠かせないものです。

毎年11月には、翌年度の『そなえよつねに共済／賠償責任保険 手引き』が全国に届けられていますので、指導者の方々には既にご承知のとおりです。

今回は、「そなえよつねに共済」についての理解を深めていただくために、特徴や補償内容をあらためてご紹介します。

1. 「そなえよつねに共済」の主な特徴

- “ボーイスカウト活動”に基づく傷害事故を総合的に補償します。
- 通常の活動のほか、指導者が同行していない活動（例：班キャンプなど）や、ベンチャーの単独活動時、活動場所への往復時も補償の対象となります。
- 日本国内はもちろん、海外での“ボーイスカウト活動”中の事故も補償の対象です。

2. 事故が発生した時の対応について

事故発生

- ① 事故発生時の状況を詳しく記録しましょう／事故が起こったときは、本人はもちろん、周囲も動揺してしまいがちです。後から事故概要を報告する必要もありますので、写真やメモでできるだけ詳しく記録を残しておくことが大切です。
- ② 日本連盟 安心・安全制度推進室まで電話やメールで速やかに連絡しましょう／TEL: 03-5652-2945 E-mail: kyosai@scout.or.jp
- ③ 「事故発生状況受付簿」が送られるので、事故の報告をしましょう／報告の際、事前に準備した活動計画書及び参加者名簿が必要です。

3. 「そなえよつねに共済」の補償内容

補償項目	概要	
傷害補償	死亡補償（死亡共済金）	“ボーイスカウト活動”中に、不慮の事故により死亡したとき
	後遺障害補償（後遺障害共済金）	“ボーイスカウト活動”中に、不慮の事故により後遺障害を被ったとき
	入院補償（入院共済金）	“ボーイスカウト活動”中に、不慮の事故により傷害を被り、入院したとき
	手術補償（手術共済金）	“ボーイスカウト活動”中に、不慮の事故により傷害を被り、所定の手術を受けたとき
	通院補償（通院共済金）	“ボーイスカウト活動”中に、不慮の事故により傷害を被り、通院または往診を受けたとき

4. 補償の対象とならない事例（一部）

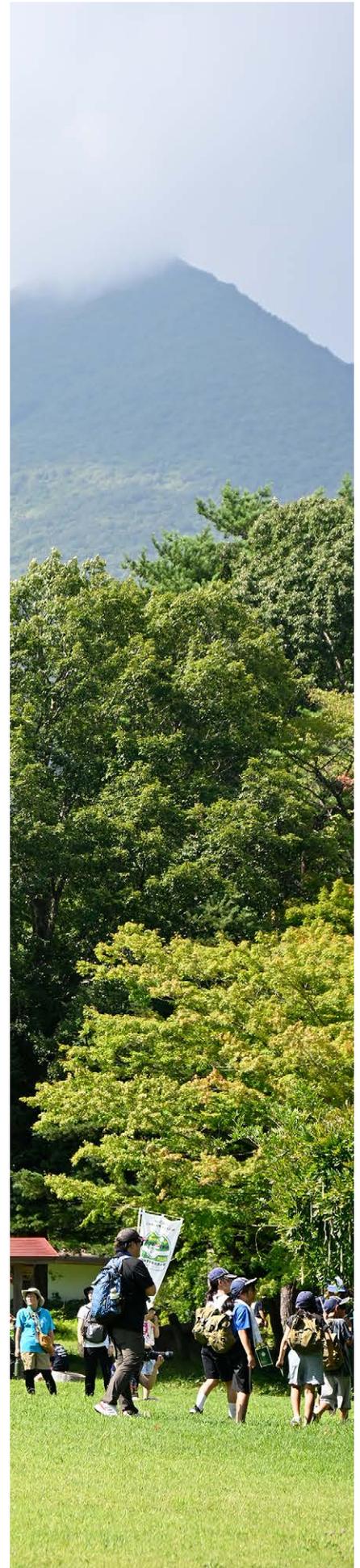
- 被共済者の故意、または重大な過失によるもの
- 専用道具を用いた山岳登山、リュージュ等や航空機の操縦、スカイダイビング、ハングライダー、超軽量動力機やジャイロプレーンの搭乗、その他これらに類する危険な行動を行っている間に生じた事故
- 食中毒（細菌性、アレルギー性等の要因を問わない）

今夏は、ジャンボリーサマーを中心に活発なスカウト活動が行われましたが、久々の野外活動でマダニやハチ等による虫刺されも多く報告されています（8/22現在 全事故報告の25%）。スカウトのための「そなえよつねに共済」を活用しながら、楽しいボーイスカウト活動がより活発なものになるようご支援ください。

「そなえよつねに共済」のご質問やお問い合わせは、下記へお願いします。

✉ e-mail: kyosai@scout.or.jp

共済委員会



久しぶりの冬場の活動は事故にご注意！

この冬は、数年ぶりにリアルな活動を計画されている隊も多いのではないのでしょうか。安全で事故のない活動を行えるように、十分な配慮はできていますか。

冬季は、雪に触れる活動を計画している隊があるかもしれません。雪に慣れていない地域の皆さんは特に、日ごろの活動に加えて、冬季特有の配慮が必要です。安全で楽しい活動のため、今一度計画を見直してみましょう。



Q

BS隊でスキーに1泊2日で実施します。配慮する点がありますか？

日ごろの活動と、基本的には安全面への配慮は同じですが、「事故(リスク)を未然に防ぐ」と「事故(リスク)を拡大させない」という両方を、しっかりと計画の段階で検討しておくことが大切です。

慣れない道具を正しく使用しなかったために事故やけがにつながる場合があります。それを防ぐためにも、自分に合った道具を使うことが重要です。たまにしか使用しないからと、サイズが合っていないものを無理に使用したり、場合によってはサイズがあっていないことに気が付かないこともあります。

サイズの合わない道具を使用すると、苦痛によるやる気の欠如、無理をすることで事故につながりますので、指導者だけでスカウトへの指導が難しい場合には、スキー指導員等へ協力依頼をすることも視野に入れておきましょう。

また、スカウト年代は突然、体調を崩したり熱を出したりすることがあります。コロナ禍で、活動場所近くの病院や、救急病院の受け入れ状況が異なることが考えられます。事前に宿泊施設に確認し、事故が発生した場合の指導者の動きと、雪道での搬送手段をきちんと確認するようにしてください。

Q

久しぶりに活動するスカウトや初めて体験するスカウトに対して、配慮する点がありますか？

無理のない活動内容や時間配分で計画をお願いします。あれもこれも欲張ったプログラムは、スカウトによっては無理をさせることにつながります。雪の上を歩くだけでも転倒しけがをすることがある中で、慣れない状況では、より一層「骨折」「捻挫」のリスクが高まります。「楽しかったけど、もっといろいろなことをしたかった」というイメージでプログラムの確認をお願いします。

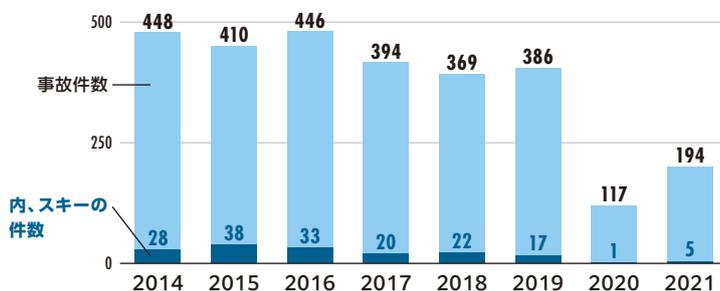
また、風雪など天候によっては、予想より体力を消耗し

ますので、寒さを凌げるスペースで休憩することが望ましいです。スキー場など公共の場では、占有できるスペースを確保する事が難しく、共有スペースを朝から晩まで占有されている方を見かけることがあります。教育の一環として、活動しているスカウトが思いやりのある行動を身につけるためにも、そのような場所を占有することがないように、小集団ごとに昼食や休憩時間をずらすなど、事前の下見などで細かくチェックをして計画しましょう。

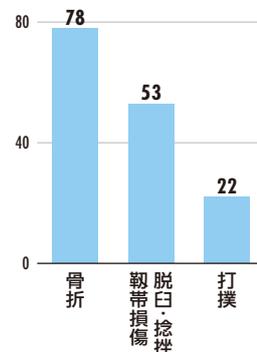
過去事例

過去10年間の統計によると、総事故件数に占めるスキー事故数はそこまで多くないものの、他の事故に比べてスカウトのけがの割合が高いという傾向が見られます。一方で、重度のけがが多いのは指導者というのもわかっています。雪の活動に慣れていないスカウトや指導者も多いため、より一層の配慮が求められます。

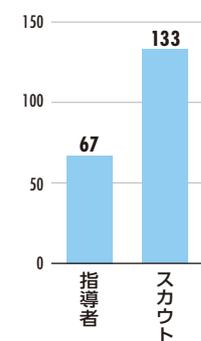
■ 事故申請件数



■ スキーにおけるけがTOP3



■ けが人の内訳



冬の活動に関連したチャレンジ章と技能章



スキー選手



アイススケート選手



安全章



スキー章



スケート章

活動を行う前に、スカウトと一緒に安全対策の策定をお願いします。スカウトの安全意識の向上につながるともに、年代に応じた、「気づき」を得る場になるはずで、これからも安全に活動を行い、スカウトが「活動は楽しかったよ」と、元気に帰宅するように活動を進めてください。

油断しないで！ 自転車で加害事故を起こしてしまったら…

コロナ禍で活動が制限されていますが、少しずつリアルな活動を再開できるようになってきました。サイクリング活動、あるいは自宅と活動場所との往復で、自転車に乗る機会も増えてきたのではないのでしょうか。

自転車に乗っていると、転倒したり、自動車に接触するなどして、運転者自身がケガをしてしまうことがあります。逆に他の方をケガさせたり、物を破損してしまうこともあります。楽しいスカウト活動を実施するには、自分だけでなく他の方にとっても安全であることが必要不可欠です。

Q 自転車で加害事故を起こした場合、まず何をしなければならぬのでしょうか？

A ケガをした被害者を見ると、動揺してしまうこともあると思いますが、まずは冷静になりましょう。
真っ先にすべきことは、被害者の救護活動と謝罪です。被害者の状態によっては119番通報します。また、警察への報告

義務がありますので、110番通報します。
救護義務を怠って現場から離れるとひき逃げになります。このようなことは絶対に避けてください。また、急に飛び出してきたなど、被害者に落ち度がある場合も同様です。

Q 自転車で加害事故を起こした場合、どのような責任を負うのでしょうか？

A 刑事事件としては、過失致死傷罪、重過失致死傷罪などの責任を負うことがあります。ひき逃げをした場合には、ひき逃げについても責任を負うことがあります。
民事事件としては、被害者に治療費や慰謝料などの損害が生じれば、損害賠償責任を負うことになります。最近では、裁判上、高校生が警察官と衝突し最終的に死亡させた事案で約9,300万円、小学生が歩行中の高齢の女性と衝突し重症を負わせた事案で約9,500万円、高校生が自転車を運転していた男性と衝突し重症を負わせた事案で約9,200万円の損害賠償

責任が認められました。大人ではなくまだ成長期にあるスカウト年代による運転でも、大きな事故に発展し得ることにご注意ください。
なお、スカウト活動中の事故については、賠償責任保険によって団や指導者の過失に基づく損害賠償責任が填補されることになります。もっとも、例えば、往復途上の事故に起因する損害については補償の対象にならない、対人賠償の補償額（支払限度額）は1人あたり1億円まで、などとされており、保険に加入していても責任がすべて填補されない可能性があります。

Q そもそも自転車で加害事故を起こさないようにするために、どうすればよいのでしょうか？

A 事前の計画（明るい時間帯か、見通しの良いルートか、余裕を持った行程かなど）、自転車の点検（ブレーキはよく効くか、車体に損傷はないか、ベルはよく鳴るか、ライトは明るく点灯するかなど）、運転方法（道路交通法

を守っているか、スピードを落として走行しているかなど）といった点について注意して、安全運転に対する意識を日頃から高く持つことが大切です。

過去事例

賠償責任保険の過去の統計によると、自転車による加害事故については、歩行者と接触してケガをさせたケース、運転中の自転車に接触して運転者にケガをさせたり自転車を破損させたりしたケース、自動車に接触して自動車を破損させたケースなどが見られます。

チャレンジ章



自転車博士

技能章



安全章



救急章



自転車章

自転車は、自動車やバイクほどの大きさはなく、大人だけでなく子どもであっても、また免許がなくても乗ることができるため、加害事故を起こしてしまうということについて、つい油断しがちです。

しかし、自転車であっても加害事故を起こしてしまった場合には、上記の通り取り返しのつかない結果を生じさせ、重大な責任を負う可能性があります。また、自分自身にケガがなかったとしても、他の方をケガさせたり、物を破損させてしまったりしたとすれば、楽しいスカウト活動が台無しです。自転車は、スカウトも指導者も運転する機会の多い乗り物です。常日頃から安全運転を心がけてください。また、本稿に関連して、この機会にぜひ「安全ハンドブック」を参照して、自転車運転に対する理解を深めてください。

賠償責任については下記をご覧ください。

https://www.scout.or.jp/member/wp/wp-content/uploads/2018/12/2023_tebiki.pdf

安全な自転車利用のために……



「自転車の安全利用の促進について」（令和4年11月1日、中央交通安全対策会議交通対策本部決定）において、「**自転車安全利用五則**」が、次のとおり改定されています。自転車は、道路交通法上の「軽車両」となり、車の「仲間」になります。したがって、車と同じように自転車を運転する人が守らなければならない交通ルールがあります。

Q 「自転車安全利用五則」は、どのような内容ですか？

A 基本的な五則は、

- ① 車道が原則、左側を通行 歩道は例外、歩行者を優先
- ② 交差点では信号と一時停止を守って、安全運転
- ③ 夜間はライトを点灯
- ④ 飲酒運転は禁止
- ⑤ ヘルメットを着用

内閣府ホームページ【内閣府交通安全対策担当（交通安全教育教材）ホームページ】<https://www8.cao.go.jp/koutu/kyouiku/index.html> をご参照ください。

Q 自転車に乗る前の点検・整備のポイントは？

A 点検・整備のポイントは、ボーイスカウト安全ハンドブックに掲載されています。合言葉は「ぶたはしゃべる」です。

- ぶ** ブレーキ ブレーキはよく効くか？
- た** タイヤ タイヤに適度な空気が入っているか？
- は** 反射材 反射材は光をよく反射するか？
- しゃ** 車体 車体（フレーム）に損傷はないか？
- べる** ベル ベルやブザーは鳴るか？

最近の自転車事故の事例

最近の実際の事例としましては、スカウトが自宅から自転車で活動へ向かう途中で、信号の無い交差点で自動車と接触する事故がありました。フロントガラスに打ちつけられ、大きく飛ばされた結果、身体の随所を打撲し通院することになりました。通院期間は一週間にも満たなかったのですが、後遺障害が認められ後遺障害共済金が支払われています。

自転車を利用した活動も次第に増えるかと思われませんが、最近の自転車事故の事例からすれば、交差点での一時停止やヘルメットの着用といったルールが守られていれば、事故を未然に防いだり、被害の軽減を図ることができたかもしれません。

その他、スマホを使用しながら運転する等の危険な「ながら運転」をしないこと、「自転車損害賠償責任保険（自転車保険）」への加入をすること等も必要です。

以上を念頭に置き、くれぐれも安全運転に務めて、スカウト活動を楽しんでください。



チャレンジ章
自転車博士



技能章
自転車章

これからのスカウト活動での配慮

各団、隊の指導者の皆様におかれましては、平素よりスカウト活動にご尽力をいただいておりますこと、厚く御礼申し上げます。

新型コロナウイルス感染症が感染症法(分類)の5類に移行され、今後ますます活動が活発になっていくことが期待されますが、反面、事故などの増加も予測されます。特に、約3年間に渡る新型コロナウイルス感染防止対策などによりスカウトも指導者も十分な活動ができていなかった可能性もありますので、綿密なご準備をお願いします。

活動に関する安全計画ができていること、それらが組織的承認を得ていること、実際にそれらの計画が運用できる体制が構築されていること、不可抗力によるアクシデントが発生したときの危機管理体制について検討され実行できることが確認されていることが必須であることはご高承のとおりです。



直接ご指導をいただく隊指導者の皆様にお伝えしたいことは大きく分けて以下の2点です。

1

スカウトたちを十分把握しプログラムレベルに見合った技量(知識、技能、心構え、チームワーク等々)を有しているかどうかを判別すること、不足している場合はそれらの技量をしっかりと身に付けさせること、もしくはプログラムの修正などが必要です。

特に年少のスカウトは、年長者が行っていることは自分もできると根拠のない錯覚をしていることがありますので注意を要します。

計画ができていたからと言ってそれだけで安全が確保されるわけではありません。それらの計画が確実に機能するよう団委員会、保護者との密接な連携により、支援体制が構築されていることの確認をお願いします。

プログラム実施前、実施中にそれらの対策が効果的に運用されていることをチェックし、不足や不都合がある場合は指導者間、スカウトと情報を共有して直ちに改善を図るようお願いします。

2

指導者の事故や負傷などが増加傾向にあります。指導者ご自身の体力、健康状態、技量などについても自覚と相互チェックをしてください。一人の指導者の離脱によって安全計画の崩壊を招き、さらに深刻な事故などを引き起こす可能性も考えられます。

最後に

夏季の活動はスカウトの大きな成長の機会です。団、隊の指導者の皆様にはご苦勞をおかけいたしますが、スカウトたちにとって有意義な夏季プログラムが実施されますようご支援、ご指導をお願いします。

総コミッショナー 村田 禎章

自転車および電動キックボードを安全に利用するために

自転車は、幅広い年齢層が利用する手軽で身近な乗り物で、スカウト活動においても活用される乗り物でもあります。また、本年7月1日の改正道路交通法の施行により、16歳以上であれば運転免許証を取得しなくても、電動キックボード（特定小型原動機付自転車[※]）を運転できるように交通ルールが新設されます。今号では、スカウト活動などあらゆる場面での活用が見込まれる『電動キックボード』と『自転車』の交通ルールについて注目してみましょう。

※ 電動機の定格出力が0.6kW以下で、車両の長さ1.9m、幅0.6m以下かつ最高速度20km/h以下のもの

自転車と電動キックボードは「車両」

自転車・電動キックボードは「車両の仲間」であることを認識して利用する必要があります。道路を通行するときは、「車両」として交通ルールを遵守するとともに交通マナーを実践するなど安全運転を心掛けましょう。

『自転車・電動キックボードとヘルメットはワンセット！』

自転車は、本年4月1日に施行された改正道路交通法では、「すべての自転車利用者に対する乗車用ヘルメットの着用努力義務」が規定され、電動キックボードにおいても「乗車用ヘルメットをかぶるよう努めなければならない」と規定されています。交通事故の被害を軽減するためには、頭部を守ることが重要ですので、自転車・電動キックボードを乗車する際は、乗車用ヘルメットを着用しましょう。

- 自転車事故で亡くなられた人の半数以上が頭部にケガをしています。
- 自転車乗車用ヘルメット非着用時の致死率は着用時と比べ約2.5倍と高くなります。

楽しいボーイスカウト活動をするために

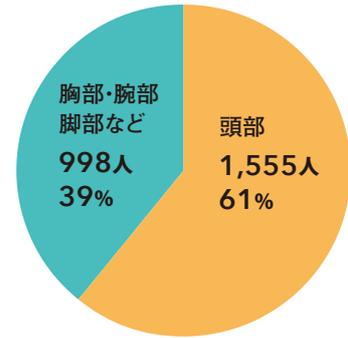
自転車に限らず、今後は電動キックボードもスカウトや指導者が運転する機会があるかもしれません。交通事故の被害を軽減するために、乗車用ヘルメットを着用し、交通ルールを遵守しましょう。また、電動キックボードは16歳未満の者が運転することはできないことを周知してください。特定小型原動機付自転車に該当しない電動キックボードも存在し、運転免許の必要なものもあります。指導者は、スカウトが運転できる（無免許運転とならない）電動キックボードであるか否かの確認を怠らないようにしましょう。これらに違反すれば刑事責任などを負うこととなり、楽しいスカウト活動も台無しです。

電動キックボードを16歳未満の者が運転し交通事故を引き起こした場合、そなえよつねに共済の補償対象にはなりませんので、絶対に運転しない・させないようにしましょう。

■ 自転車乗車中死者の人身損傷主部位

平成26年～平成30年合計

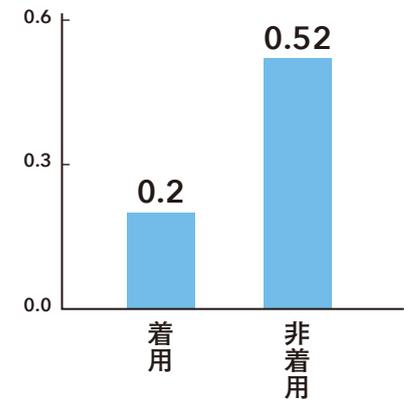
③ 「人身損傷主部位」とは、損傷程度が最も重い部位（死亡の場合は致命傷の部位）をいう。



■ ヘルメット着用状況別の致死率比較

平成21年～平成30年合計

③ 「致死率」とは、死傷者のうち死者の占める割合をいう。



平成31年4月警察庁交通局
「自転車関連事故にかかる分析」より



電動キックボードの利用にあたっては、警視庁の Web サイトの内容も参照しましょう。

🔍 令和5年 警視庁 電動キックボード



気象予報と安全 — その空は世界と繋がっている

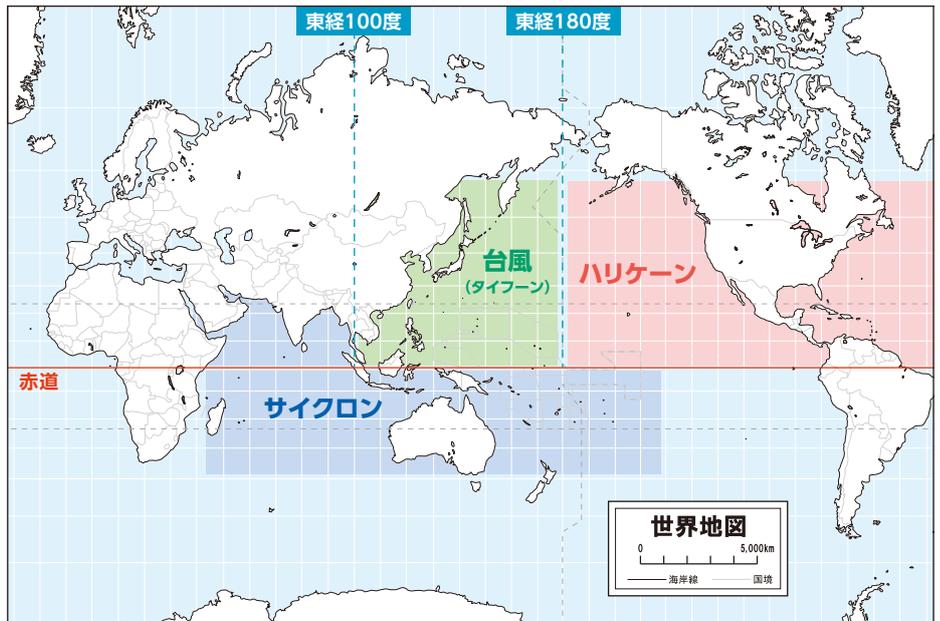
気象状況や天気の詳細を的確に把握することはスカウト活動の安全面から極めて大切なことであり、また、スカウトらの創造力の成長にもつながるものです。今回は、気象現象を世界規模で捉えることが新たな学びにつながるのでは、という観点からのお話です。

「台風」ところ変われば名前も変わる?!

台風 (Typhoon) と同じ熱帯低気圧に、「ハリケーン」や「サイクロン」があることはおなじみだと思います。これは、発生場所でも名前のつき方が分かれるものです。

空に国境はない……から!?

空を動く台風には国境も道路も関係ありません。時に、基準となる境を越えることがあります。そうすると、これまで『ハリケーン』と呼ばれていたものが急に「台風」となったりします。近年では2018年の台風17号は「もともとハリケーンだった台風」で、2019年の台風22号は「インド洋に行ってしまったのでサイクロンになってしまった台風」でした。

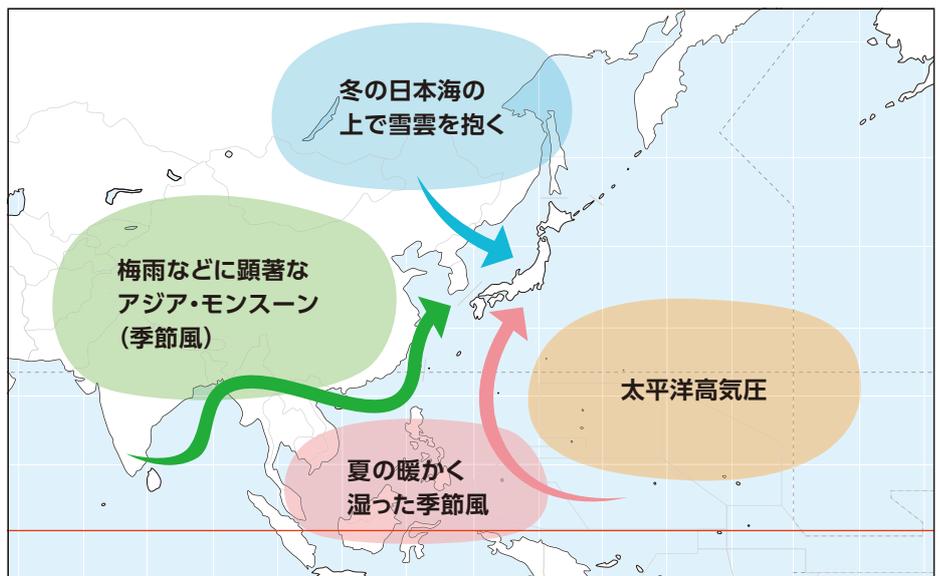


その雨は、どこから来た水?!

9月は台風シーズン。その他にも6・7月は梅雨の大雨があり、冬には日本海側は大雪と、日本列島は一年中、どこかで水が降り続けています。では、活動中に喉を潤すその水は、どこから来たものなのでしょうか。

日本は世界有数の「水大国」!!

巨大なユーラシア大陸の東の端で、かつ、間に日本海という海をはさみ、また南には世界で最も水温が高い南西部太平洋があるという類まれな立地条件で、日本は年中、水が降り注ぐ国となりました。水は、山深い森の地下から湧いて出てくる……のもっと手前の「水の由来」を気にしてみると、ぐっと世界が近く感じられるのではないのでしょうか。



きたい知恵や教唆、また、目の前のミクロの視点を地球規模のマクロの視点に転換してくれる、大きなチャンスがそこかしこに溢れています。スカウトハンドブック P.178にあるように空の変化を見るだけで今後の天候の予測も少しはできますが、

加えて、この気象・空はどのくらいの広がりを持つものなのかをスカウトとともに感じることは、気象の本質的な理解に繋がるものと期待します。

企画・監修: 共済委員会

スマホの影響

指導者、スカウト、誰もが持っているスマートフォン（スマホ）。スマホは我々の生活にとってなくてはならないデバイスになっており、大人も子どもも手放せないという人も多いのではないのでしょうか。今回はスマホの影響について考えてみます。

スマホは、調べる、見る、読む、遊ぶ、撮る、位置確認、支払うなど、大いに役立つ道具です。むしろそれがなくては行動が困窮してしまうほど頼りになる相棒です。しかし、そんな便利な道具でも、使い方ひとつで心身への計りしれないストレスの要因となることもある、ということを理解する必要があります。

近年、ゲームと SNS によるスマホ依存症が問題となっており、特に男性がゲーム、女性が SNS にはハマるというデータがあります。ゲームはいつでもどこでも気軽にプレーすることができ、興味を引く映像や音楽、ゲームの中で使えるポイントがもらえたり、世界中のプレーヤーと対戦しレベルアップしていくという、大人でも引き込まれる仕掛けが仕組まれています。よりいいアイテムを手に入れるために「課金」することにより、泥沼にはまってしまう人もいます。SNS は居心地のいいサイトを見つけると「自分を認めてもらえている」、「ここが私の居場所！」と感じ、ハマってしまうケースがあります。その反面、信じていた「私の居場所」で叩かれてしまうとへこみ、時には「自殺」を考えるに至ることがあります。

スマホの影響について例を挙げてみます。

- 勉強や食事や睡眠時間を削り、長時間をスマホに費やしてしまう。
- 夜更かしのため朝起きられず、遅刻や欠席が増え学業成績が低下。
- スマホが目の前にあると気が散ってしまい、集中力や認知能力が下がる。
- スマホが使えない環境になると不安を感じる。
- ネガティブなニュースや SNS の投稿に感情を揺さぶられてしまう。
- 情報をうまく整理できないと過剰な不安やストレス、イライラが募る。
- コミュニケーションが取れず、人間関係がうまくいかなかったり、友達関係が悪化する。
- 使用時間のことで注意されると、感情のコントロールができず当たり散らし、家族との関係を悪化させる。

この記事はスマホの使用自体を否定するものではありません。スマホに限ったことではなく、すべてにおいて「バランスよく」というのが大切です。「道具」は使いこなすものであり、「道具」に使われ、振り回されてはいけません。スカウト活動においても自分のスキルアップに、プログラム立案に、仲間どうしの連絡に、野営やサイクリングに、隊・班集会にと、大いに役立つこの「道具」を有効に活用してください。

ルールを決めて、デジタルデトックス【一例】

スマホ依存から脱却するために時間や場所など、ルールを決めて使うようにしましょう。

- 娯楽のために使用するのは2時間まで
- 夜の9時以降は使用しない
- トイレやお風呂には持ち込まない
- 布団に入ったら触らない
- 一定の時間触れない
- アプリの通知をオフにする時間をつくる

あえて、意識的に無理なくスマホから距離を置く工夫をしてみましょう。最初は不安で仕方ないと思いますが、勉強時間を取れる、睡眠の質が向上する、ストレスが軽減する、自分で考える思考力が高まるなど、の効果が得られるはずです。



日本列島と地震 ～災害は想像を超えてやってくる～

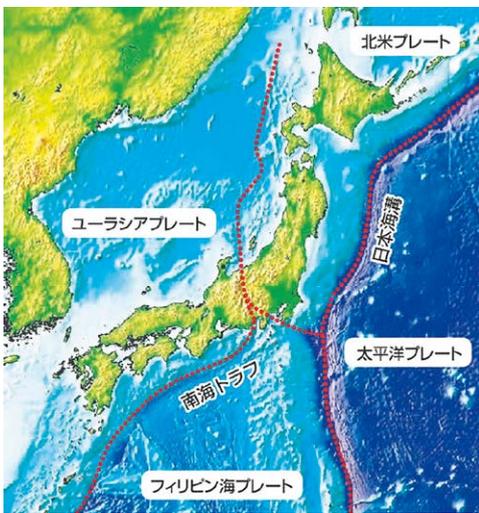
日本列島では地震がなぜこれほど多く発生するのでしょうか？ 日本列島は、太平洋プレート・フィリピン海プレート・北米プレート・ユーラシアプレートの4枚のテクトニックプレートが定常的にせめぎ合っている、地球上でも稀な大変動帯に位置しています[図1]。このせめぎ合いによって日本列島を構成している岩盤に猛烈な歪みが常に蓄積し続けています。その歪みに岩盤が耐え切れなくなると、岩盤の破壊が面状におこります。これが地震であり、破壊面が断層です。

日本列島とその周辺海域では、マグニチュード(M) 5クラスの地震は週に1～2回、M6クラスの地震は2か月に1回、M7クラスの地震は年1回起きています。津波は地震に伴う海底の地形変化によって引き起こされるため、波浪とは異なり海底から海面までの莫大な量の海水の移動が起きます。水深の浅い近海になると津波の伝播速度は遅くなるため後続の速度の速い波が追いつき、大量の海水が塊となって一気に海岸線に押し寄せます。海岸地形によっても波高は変化し、局所的に猛烈な高さまで達する場合があります。地震は震源からの距離が遠くなれば、巨大地震でも揺れは感じませんが、津波は極めて遠いところで発生しても高速で伝播し、巨大災害になるのです。1960年に発生した M9.5 のチリ地震による津波は22時間後に日本に到達し、東北地方を中心とした太平洋沿岸の広い範囲に大きな被害をもたらしました。

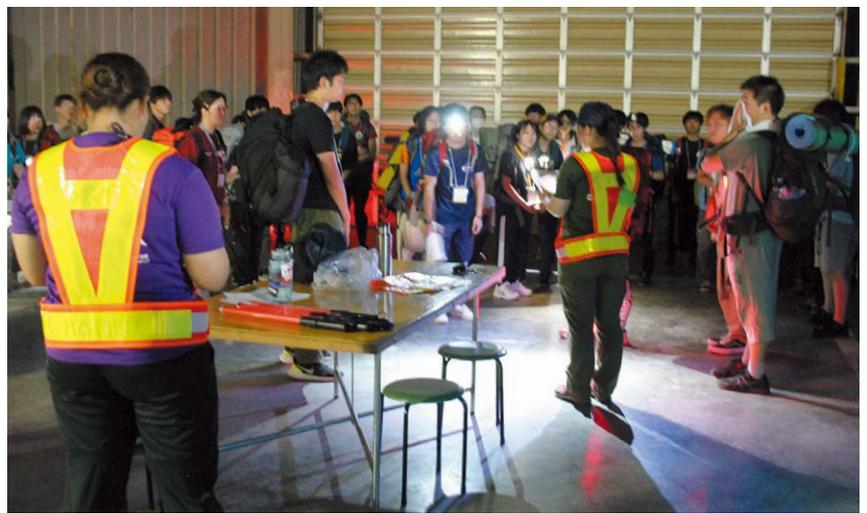
駿河湾から日向灘沖にかけての海底には600km以上に及ぶ溝状の地形があります。これが南海トラフです。ここでは約100～200年の間隔で巨大地震とそれに伴う津波が発生しており、近い将来起こる可能性が高いことが指摘され、備えが進んでいます。その一つとして、津波や土砂災害など、災害別にハザードマップがほとんどの地方自治体で用意されていることはご存知でしょうか？

[参照] 国土交通省：ハザードマップポータルサイト「わがまちハザードマップ」<https://disaportal.gsi.go.jp/hazardmapportal/hazardmap/index.html>

これらのマップには避難場所や避難所となる公共施設が詳細に示されています。たとえば、海岸近くの自治体では、避難すべき公共施設や主要幹線道路等には海拔が表示されています。しかし、このような備えがあっても、それを自らのこととして捉えなければ、意味がありません。各自が防災意識を高め、自分の命は自分で守る自助が第一であり、それができて初めて近所や地域の方々と助け合う共助ができるのです。スカウトが自助・共助を自然とこなせるように団や地区、県連盟が支援することは肝要です。スカウティングの本質は、“人のお世話にならぬよう 人のお世話をするようそしてむくいを求めぬよう” 日ごろの活動で培った能力を他者のために活かすことなのであります。



海上保安レポート2007からの抜粋
<https://www.kaiho.mlit.go.jp/info/books/report2007/tokushu/p033.html>



2023年9月開催：ローバースカウト集合訓練の一コマ

～いざという時に備えて～

災害は忘れた頃にやってきます。何事にも“そなえよつねに”

- 自然災害の理解
- 家族の中での行動の確認
- ハザードマップの確認
- 避難所の把握
- 持ち出し品の確認
- 備蓄品の確認
- ローリングストックの確認

巨大地震が発生すると道路の復旧に時間がかかり、被災地外から物資が届くには時間がかかります。起きる状況を想定し、必要なものを備えておくことが重要です。

賠償責任保険と安全

ボーイスカウトには「そなえよつねに」というモットーがあります。これは、活動における準備の大切さや、未来の成長と活躍に向けて努力するといった意味もありますが、安全面で考えれば、事故を発生させないための注意喚起の言葉でもあります。つまり、他人にケガさせない、損害を与えないということを意識して行動することが大切です。

事故の発生を事前に予知することは出来ませ

ん。ただし、賠償事故を生じさせてしまうリスクの存在を日頃から理解しておけば、事故の発生頻度が下がる可能性は高くなります。

リスクとは「危険」と訳されることが多いのですが、「危険の生じる可能性や要因」も意味しますが、すなわち、何が事故発生の原因になるのかを把握しておくことは、賠償事故においても、危険予知という観点で、とても重要なことなのです。

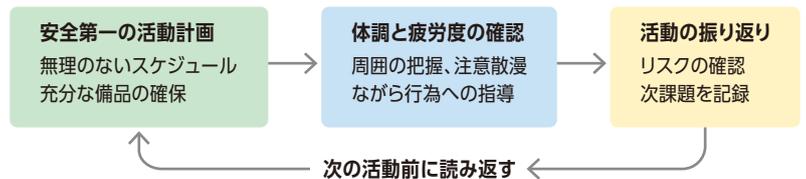


“賠償責任事故におけるリスク”

では、いったい何がリスクなのでしょう？ リスクと対策を以下にまとめてみました。

想定されるリスク	対策
サイクリング、登山、スキー、スケート	専門的な知識を有した指導者を選任、必要な備品の確保／普段の活動以上の人数で管理者を配置
体調不良や寝不足等健康面の不安	疲労・寝不足等にならないスケジュールの作成／連泊の活動においては、隊員の体調面をしっかりと管理
よそ見・脇見・注意散漫等	休憩時間も含めた、リーダー・保護者の見守り活動／スマホ・タブレット等のながら行為への注意指導
慣れた土地や環境に対する油断	周囲の環境等、危険な場所の事前確認、当日の天候予想、活動開始前における注意事項の伝達

活動の最後に“振り返り”も大切です。こういったことがリスクを高めていたか参加者全員で話し合みましょう！それを記録しておき、次の活動前に読み返すことで、リスクの削減に必ずつながるはずです。



示談交渉と過失割合

賠償事故が発生した場合に、事故相手との交渉で忘れてはならないのが「過失割合」です。これは、当事者同士が、それぞれの程度の不注意や行動ミスがあったか、損害額を負担するにあたっての責任割合をいいます。

過失割合は、当事者間の示談で取り決められることもあります。保険会社における割合認定は、過去の判例等を参考に判断されます。従って、素人が勝手に取り決めてしまうと、支払われる保険金と示談金の間に差額が生じることとなり、その差額は、いわゆる自腹支払いとなってしまいます。

事故発生の直後は心理的に動揺していることもあり、「私の責任です」と言ってしまう人も多いのですが、相手の損害に対しては、「すみませんでした」としっかりお詫びの意思を示しつつも、「賠償については、後ほどご相談させてください」と話し、その場での約束はしないようにしましょう。冷静になって考えることで適切な判断が出来るからです。後日、事故状況を分析し、保険会社や専門家の意見をもとに交渉すると良いと思います。

もしも事故が起こったら…

最善の注意を払ったとしても、偶然的事故というのは起こってしまうものです。その時どう対応したら良いか確認しておきましょう！

- 1 けが人がいたら救護を最優先！**
あわてずに行動、救急車の手配、応急処置
- 2 二次被害の防止**
安全な場所への避難、必要に応じて警察への通報も検討
- 3 事故状況の確認**
当事者氏名と連絡先の確認、目撃者の証言聴取と記録
- 4 保険会社へ連絡**
スカウト活動の場合は、日本連盟の安心・安全制度推進室へ

日本連盟が付保する賠償責任保険

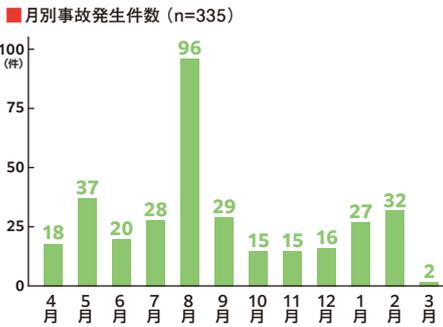
日本連盟が付保している「対人・対物の賠償責任保険」は、加盟登録する団及び指導者を対象として、ボーイスカウト活動中の不慮の事故に起因して第三者に損害が生じた場合に、団や指導者の過失に基づく損害賠償額を、認められる過失割合に応じて補償するものです。ただし、補償の対象とならない場合もありますので、『そなえよつねに共済／賠償責任保険 手引き』（<https://www.scout.or.jp/member/group-operation/mutual-aid>）にて詳細をご確認ください。事故が生じたときは、直ぐに日本連盟の安心・安全制度推進室へご連絡ください。

2019（令和元）年度

そなえよつねに共済 事故データ分析

「そなえよつねに共済」で取り扱った事故データ分析の結果をまとめましたので報告いたします。2012年度から全加盟員が保険（2014年度からは共済）対象となり、ボーイスカウト全体における事故の傾向が把握できるようになりました。事故発生件数（報告件数）は前年度と同様の335件で、傷病の延べ数は495件でした。いくつか気づいた点をコメントしましたので、安全管理の参考にいただければ幸いです。

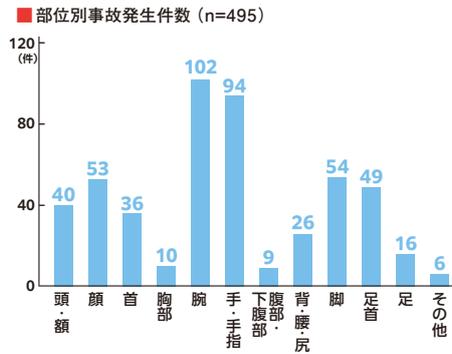
発生月別



8月に事故事例が多い傾向は例年と同様で、全事故件数の約28.7%を占めています。8月の事故を分析すると、前年度(2018年度: 63件)より33件増加の96件で、そのうち88件が夏季活動(野営や倉営)中に発生しています。薪割り中の切り傷や火起こし中のやけどなどがみられますが、ハチやブユ、ダニによる虫刺され等も数多く報告されています。服装に注意を払うことや、害虫対策を行うことが必要です。

3月の事故発生件数が極端に低くなっていますが、これは新型コロナウイルスによる活動数の低下によるものだと思います。

部位別（延べ数）

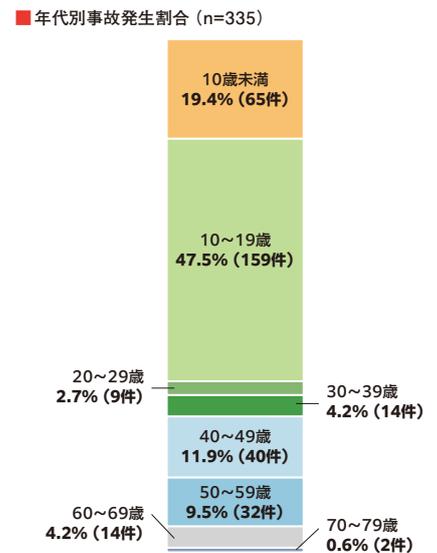


昨年からの傾向ですが、頭や額に対する受傷数が減少しています。一方、腕や手、手指に対する受傷数が前年度(161件)より35件増加の196件となっています。腕はスキー、スノーボード、スケートなどの冬季活動中の受傷が多くなっており、内容としては骨折などがあげられます。

また手や手指において気になることは、左手指の受傷数が右手指の3倍にのぼることです。内容を見ると、薪割り中や調理中の受傷が多くなっています。これは右利きの人が多いこと由来すると思われます。薪割りや調理の際の注意事項を今一度確認し、十分にスカウトを指導してください。

年代別

年代別では、19歳までの割合が約70%にあたる224人でした。20代9人、30代14人と少数ですが、40代40人、50代32人、60代14人となっており、70代でも2人の事故報告がありました。

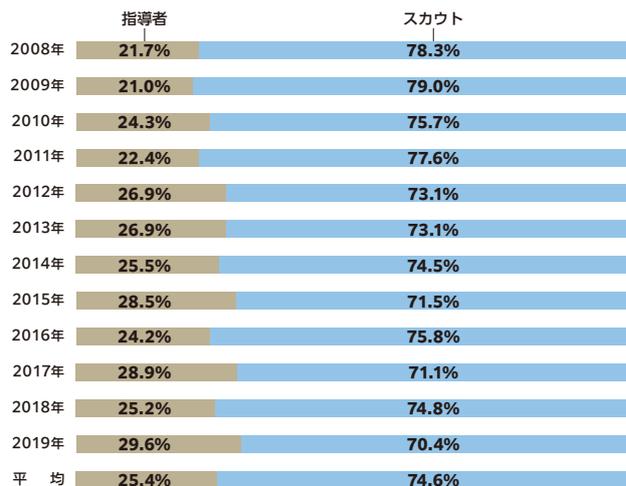


部門別

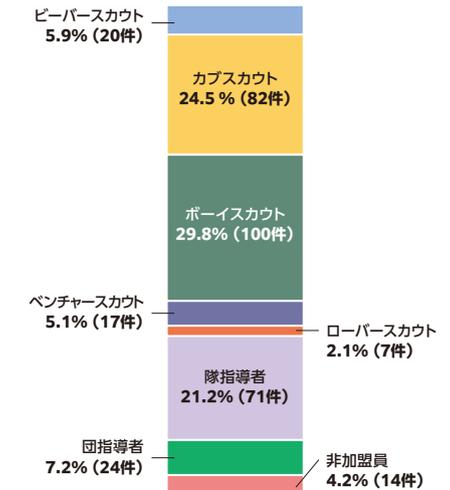
部門別の傾向は、ビーバースカウトが0.7%減少、カブスカウトが1.5%減少、ボーイスカウトが1.5%減少、ベンチャースカウトが4.1%減少、ローバースカウトが0.9%増加しました。

全事故に占める割合（非加盟員を除く）は、スカウト全体で70.4%と、前年度より4.4%減少しました。一方、指導者の割合は29.6%と、前年度より増加しています。

■ 指導者／スカウトの事故発生割合の変化 (n= 全体数335-非加盟員14)



■ 部門別事故発生割合 (n=335)



部門別 上位3傷病

部門	1位	2位	3位
ビーバースカウト	打撲(6件)	裂けた傷/骨折/脱臼・捻挫・靭帯損傷(各3件)	刺し傷/やけど(各2件)
カブスカウト	骨折(23件)	脱臼・捻挫・靭帯損傷(15件)	裂けた傷/切り傷/打撲(各12件)
ボーイスカウト	切り傷/骨折(各20件)	やけど(10件)	裂けた傷/打撲(各7件)
ベンチャースカウト	骨折(8件)	切り傷(6件)	脱臼・捻挫・靭帯損傷/打撲/やけど(各2件)
ローバースカウト	打撲(3件)	骨折(2件)	切り傷/脱臼・捻挫・靭帯損傷(各1件)
指導者	骨折(42件)	打撲(25件)	脱臼・捻挫・靭帯損傷(21件)

活動内容

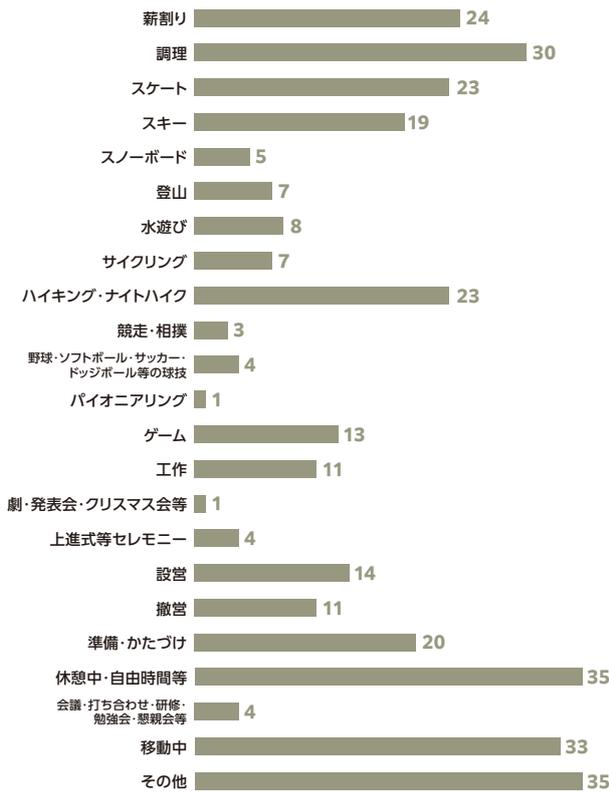
ビーバースカウト部門での事故1位は「移動中」で7件、2位は「休憩中・自由時間等」で4件でした。移動中は帰宅前後の時間などに発生しています。全発生件数が20件のビーバースカウト部門において、半数以上は活動外（プログラム以外の時間）で発生しています。活動前後や休憩時間も十分な安全対策を講じることが必要です。

カブスカウト部門での事故1位は「休憩中・自由時間等」で12件、2位は「スケート」で10件でした。ビーバースカウト部門と同様に、活動外の時間での発生もみられますが、多くの発生が活動中になります。

ボーイスカウト部門での事故1位は「薪割り」で15件、2位は「休憩中・自由時間等」で14件でした。薪割りでの件数は昨年度よりも増加しています。保護具の着用などの教育はもちろんですが、なぜ着用する必要があるのかなどの理由を明確にして指導することも必要です。

ベンチャースカウト部門での事故1位は「スノーボード」「移動中」でそれぞれ3件でした。ローバースカウト部門での事故1位は「スキー」「移動中」でそれぞれ2件。指導者の事故1位は「準備・かたづけ」で10件、2位は「スキー」「ハイキング・ナイトハイク」でそれぞれ9件でした。

■活動内容と事故発生件数 (n=335)



■部門別 最も事故が多かった活動内容

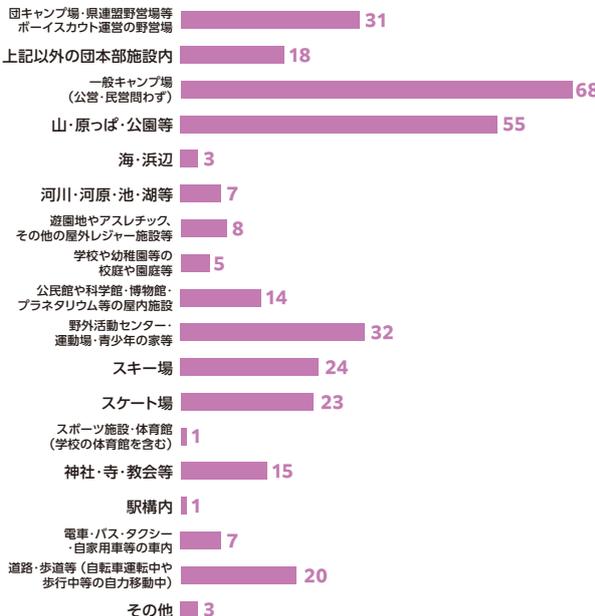
部門	プログラム
ビーバースカウト	移動中 (7件)
カブスカウト	休憩中・自由時間等 (12件)
ボーイスカウト	薪割り (15件)
ベンチャースカウト	スノーボード/移動中 (各3件)
ローバースカウト	スキー/移動中 (各2件)
指導者	準備・かたづけ (10件)

発生場所

事故の発生場所として最も多かったのは「一般キャンプ場」でした。ついで「山・原っぱ・公園等」です。前年度と傾向は変わりません。野外での活動が増えることで、事故発生の可能性が高くなるということを今一度理解する必要があります。

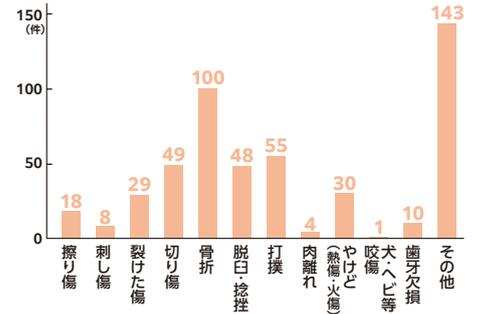
また、移動中の事故発生も多くなっていることがわかります。交通事故など命に関わるものも発生していますので、十分注意することが必要です。

■発生場所と件数 (n=335)



傷病別 (延べ数)

■傷病別事故発生件数と事故割合 (n=495)



傷病別では、「骨折」の割合が最も多く、前年度 (94件) より6件増加の100件で第1位でした。第2位は「打撲」で、前年度 (45件) から10件増加の55件でした。第3位の「切り傷」は前年度 (68件) から19件減少の49件でした。これら3傷病で全傷病の41.2%を占めています。

「骨折」は、うち32件が指導者によるものでした。スカウトの骨折の場合、入院は長くとも10日程度でしたが、指導者の場合は1か月以上入院するケースもみられます。「骨折」は、スカウト活動のみならず、日常生活にも大きな影響を及ぼしますので、十分注意しましょう。

また、「その他」の中で気になったのが、ハチやブユ、ダニによる虫刺されです。前年度に比べても増加しています。服装や害虫対策などに十分に配慮してください。

まとめ

共済事業に移行して6年。全体的な傾向は大きく変わりませんが、いくつか気になった点があります。各項目について、過去の本誌で参考になるものを示しますので、こちらもあわせてご覧ください。

ひとつは、虫刺されによる受傷が増加傾向にあることです。蚊やダニなどは、節足動物媒介感染症 (蚊やダニなどから伝播される寄生虫、ウイルス、細菌などによって人に起こる疾患のこと) を引き起こす可能性があります。活動時に「長袖を着る」「虫除けスプレーなどの防虫剤を塗る」「蚊取り線香等を焚く」などして、虫刺され受傷の低減に努めてください。[参考: 本誌2016年7月号「地球温暖化と安全」]

次に、休憩中の事故発生の再度防止徹底のお願いです。ビーバースカウトやカブスカウトにとって、休憩時間は自由時間です。休憩時間中の活動範囲をあらかじめ明確に指定する、指導者や保護者の協力を得て、休憩時間中も安全管理を十分に行うなどして事故の防止に努めてください。[参考: 本誌2014年9月号「休憩・自由時間中の事故」]

最後に、指導者の事故発生件数の増加です。件数、割合ともに増加傾向が続いています。指導者の受傷は重症化しやすく、完治までの期間も長くなります。安全対策を十分に行い、無理をせず、他の指導者や保護者、関係者と協力をしながらスカウト活動を行っていただければと思います。[参考: 本誌2011年9月号「減少しない指導者の事故」、2011年11月号「指導者自身の安全の確保を」]

「セーフ・フロム・ハーム」・安全委員会

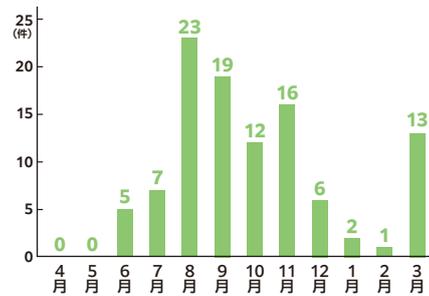
2020年度（令和2年度）

そなえよつねに共済 事故データ分析

「そなえよつねに共済」で取り扱った事故データ分析の結果がまとまりましたので報告いたします。2012年度から全加盟員が保険（2014年度からは共済）対象となり、ボーイスカウト全体における事故の傾向が把握できるようになりました。事故発生件数（報告件数）は104件で、傷病の延べ数は153件でした。いくつか気づいた点をコメントしましたので、安全管理の参考にいただければ幸いです。

発生月別

■ 月別事故発生件数 (n=104)



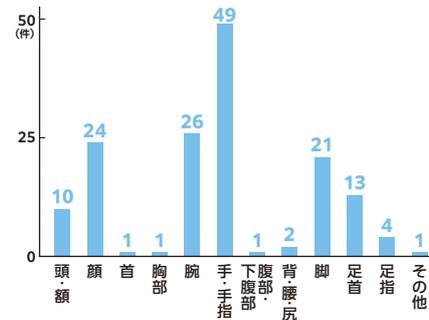
新型コロナウイルス感染症の影響により、事故発生数の低下が顕著になっています。特に4月と5月の件数は0件ですが、これは緊急事態宣言が発出され活動自体が減っていた時期と重なります。

8月に事故件数が多い傾向は、例年と同様です。全事故件数の22.1%を占めますが、昨年度(2019年度:96件)より73件減少しています。活動中に誤って転倒する、薪割り中の切り傷や火起こし中のやけどのほか、ハチやブユ、ダニによる虫刺されによる被害も報告されています。

1月、2月の件数が少ないことも緊急事態宣言の発令と相関が見られます。3月になると緊急事態宣言が解除されて活動が再開されたことに伴い、事故件数も増加しています。

部位別（延べ数）

■ 部位別事故発生件数 (n=153)



受傷部位の傾向としては、頭部や顔、腕から先、脚下がほとんどを占めています。例年に比べ活動自体が減っていたため受傷数は減少していますが、部位別の割合に大きな違いは認められません。事故による受傷部位の傾向は毎年同様であり、なお一層の注意をしていかなければなりません。

顔の受傷が24件ありますが、このうち顔面（鼻、耳、ほお、あご等）は16件、うち11件は自転車での転倒によるものです。自転車での転倒は一歩間違えると周囲を巻き込んだ大きな事故になる可能性があります。安全対策のみならず、自転車の乗り方に関する知識も十分に身につける必要があります。

年代別

19歳までの割合が70%にあたる73人でした。20代と30代は少数ですが、40代は12人、50代では11人に事故が発生しています。さらに、60代は3人、70代も1人の事故報告がありました。

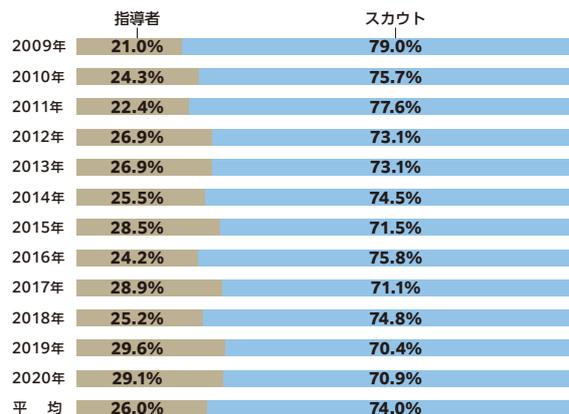
■ 年代別事故発生割合 (n=104)



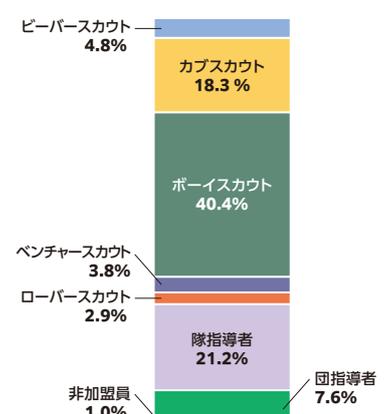
部門別

部門別の傾向はビーバースカウトが1.1%減少、カブスカウトが6.2%減少、ボーイスカウトが10.6%増加、ベンチャースカウトが1.3%減少、ローバースカウトが0.8%増加でした。全事故に占めるスカウト全体では70.9%とでした。一方、指導者の割合（非加盟員を除く）は29.1%と昨年とほぼ同様です。

■ 指導者／スカウトの事故発生割合の変化



■ 部門別事故発生割合 (n=104)



部門別 上位3傷病

部門	1位	2位	3位
ビーバースカウト	骨折 (3件)	擦り傷/打撲 (各1件)	—
カブスカウト	骨折 (6件)	切り傷/打撲 (各4件)	切り傷 (2件)
ボーイスカウト	切り傷 (14件)	骨折 (11件)	脱臼・捻挫・靭帯損傷 (5件)
ベンチャースカウト	切り傷/擦り傷 (各2件)	脱臼・捻挫・靭帯損傷/打撲/骨折/歯牙欠損 (各1件)	—
ローバースカウト	擦り傷 (3件)	やけど/打撲 (各1件)	—
指導者	骨折 (12件)	脱臼・捻挫・靭帯損傷/擦り傷 (各7件)	打撲 (6件)

活動内容

ビーバースカウト部門での事故1位は「ゲーム」で2件、2位は「ハイキング・ナイトハイク」「移動中」「休憩中・自由時間等」で各1件でした。プログラム中が大多数を占めますが、活動前後や休憩時間も十分な安全対策を講じることが必要です。

カブスカウト部門での事故1位は「休憩中・自由時間等」で5件、2位は「サイクリング」「工作」「移動中」でそれぞれ2件でした。

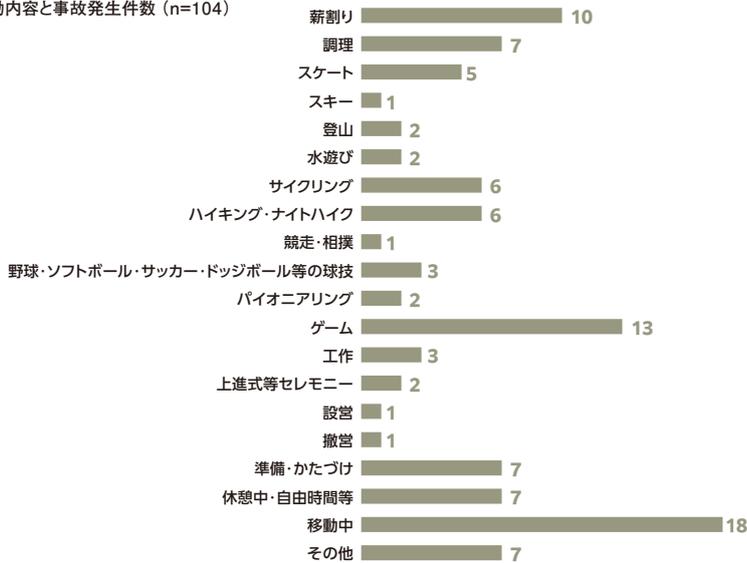
ボーイスカウト部門での事故1位は「移動中」で9

件、2位は「薪割り」で8件でした。移動中は自転車での事故が多く、安全保護具の着用や正しい交通ルールを守ることが重要です。

ベンチャースカウト部門は、「サイクリング」「ハイキング・ナイトハイク」「移動中」で各1件。ローバースカウト部門は、「調理」「登山」「サイクリング」で各1件でした。

指導者の事故1位は「ゲーム」「移動中」でそれぞれ4件、2位は「準備・片づけ」で3件でした。

■ 活動内容と事故発生件数 (n=104)



■ 部門別 最も事故が多かった活動内容

部門	プログラム
ビーバースカウト	ゲーム (2件)
カブスカウト	休憩中・自由時間等 (5件)
ボーイスカウト	移動中 (9件)
ベンチャースカウト	サイクリング/ハイキング・ナイトハイク/移動中 (各1件)
ローバースカウト	調理/登山/サイクリング (各1件)
指導者	ゲーム/移動中 (4件)

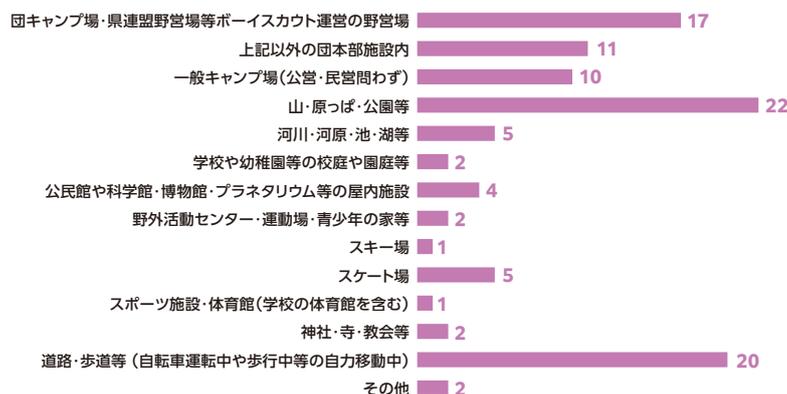
発生場所

事故の発生場所として最も多かったのは「山・原っぱ・公園等」でした。ついで「道路・歩道等(自転車運転中や歩行中等の自力移動中)」です。新型コロナウイルス感染症によりキャンプ等の活動が自粛された

ことも影響しています。

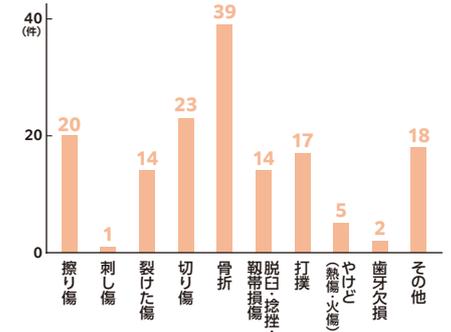
移動中は大きな事故につながる可能性が高いため、今一度安全に対する意識をもつことが重要です。

■ 発生場所と発生件数 (n=104)



傷病別(のべ数)

■ 傷病別事故発生件数と事故割合 (n=153)



傷病別では「骨折」の割合が最も多く、前年度より61件減少の39件で第1位でした。第2位は「切り傷」で前年度49件から26件減少の23件でした。第3位の「擦り傷」は昨年度から2件増加の20件でした。これら3傷病で全傷病の53.6%を占めています。

またその中で気になったのがハチやブユ、ダニによる虫刺されです。毎年虫刺されの報告は多いため、服装や害虫対策などは今一度十分に配慮してください。

まとめ

共済事業に移行して7年目、新型コロナウイルス感染症が流行してから初めての本格的な事故分析になりました。やはり活動が縮小したことから、事故発生件数が大幅に減少しています。裏を返せば、コロナ禍で活動自粛になる前までは、より活発な活動を展開していただいていたということにもなります。

活動を再開していくうえで、気をつけていただきたい内容についてまとめます。

第一に、休憩中の事故発生の防止です。ビーバースカウトやカブスカウトにとって、休憩は自由時間です。大人たちにとっては体を休める時間も、子どもたちにとっては格好の遊ぶ時間になります。安全管理を十分に行い、事故防止に努めてください。

第二に、久しぶりの野外活動によるけがです。新型コロナウイルス感染症により、キャンプなどの活動を自粛されていた方も多いかと思いますが、こうした状況からキャンプなどを再開すると、思わぬけがや事故、病気になる可能性があります。特にナイフやナタによる手元のけが、熱中症などの危険性について、改めて考え、スカウトに伝えていただきたいと思います。

最後に、指導者の事故についてです。今回の事故分析において、指導者の事故割合は変わりありませんでした。つまり、活動が活発化すると事故件数が増えるということです。ぜひ自身の状態を把握いただき、無理をせずスカウトたちの活動を支援いただければと思います。

2021（令和3）年度

そなえよつねに共済 事故データ分析

「そなえよつねに共済」で取り扱った事故データ分析の結果がまとまりましたので報告いたします。2012年度から全加盟員が保険（2014年度からは共済）対象となり、ボーイスカウト全体における事故の傾向が把握できるようになりました。2021年度の事故発生件数（報告件数）は178件で傷病の延べ数は269件でした。データやコメントなど、安全管理にお役立てください。

発生月別

COVID-19の影響で低下していた活動数が回復の傾向を見せたことに伴い、事故発生件数が2020年度の104件から、2021年度は178件と増加しています。また、9月の件数が1件となっています。こ

■ 月別事故発生件数 (n=178)



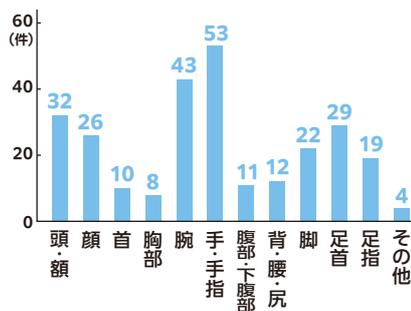
これは緊急事態宣言が発出されていた時期と重なります。

夏季と冬季に事故が多い傾向は例年と同様です。7月から9月の事故発生件数は全事故件数の30.9%を占めています。夏季の活動に特徴的な調理中の火傷や切り傷の他、ダニなどによる虫刺され被害も多数報告されています。12月から3月の事故発生件数は全事故件数の27.5%を占めています。この時期はスキーやスケート中の転倒などによる骨折や捻挫など重症化する事故が多くなっています。

部位別（延べ数）

受傷部位の傾向としては、頭部や顔、腕から先、脚下が83.3%でほとんどを占めています。この受傷部位の傾向は毎年変わらず、特に手・手指への受傷が多くなっています。

■ 部位別事故発生件数 (n=269)



手・手指への受傷の内訳を見ると、利き手側

でない手・手指に対して包丁での切り傷、ハンマーなどでの打撲、ダニなどによる虫刺されが多数を占めています。ハンマーを使用する際には利き手でない側は手袋をするなど、各作業の際には十分な安全対策が必要であることを改めて確認しましょう。

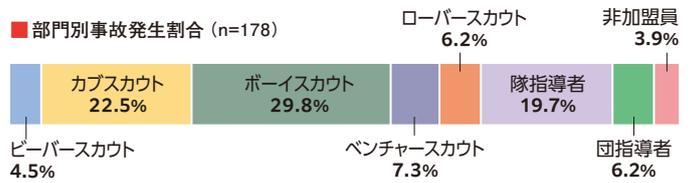
部門別 上位3傷病

	1位	2位	3位
ビーバースカウト	骨折 [3件]	脱臼・捻挫・靭帯損傷/犬・へび等咬傷 [各2件]	歯牙欠損 [1件]
カブスカウト	骨折 [16件]	打撲 [10件]	擦り傷 [8件]
ボーイスカウト	打撲 [12件]	やけど [11件]	擦り傷/骨折 [各10件]
ベンチャースカウト	脱臼・捻挫・靭帯損傷 [4件]	裂けた傷/やけど [各3件]	擦り傷/切り傷/骨折/歯牙欠損 [各1件]
ローバースカウト	打撲 [7件]	裂けた傷 [3件]	脱臼・捻挫・靭帯損傷 [2件]
指導者	骨折 [16件]	裂けた傷/打撲 [各6件]	切り傷 [5件]

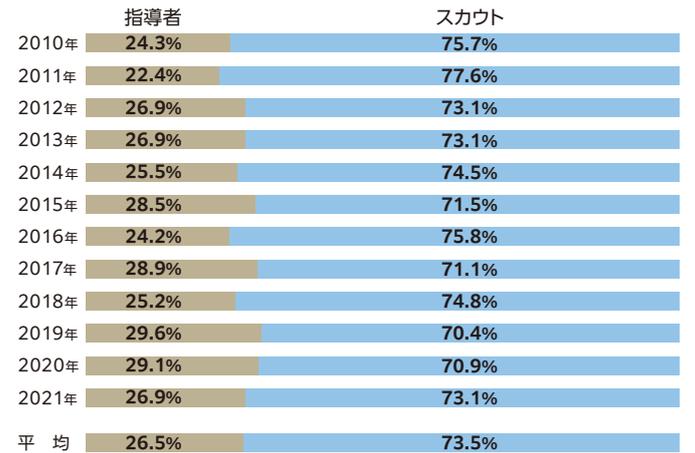
部門別

前年度に比べ、部門別の傾向はビーバースカウトが0.3%減少、カブスカウトが4.2%増加、ボーイスカウトが10.6%減少、ベンチャースカウトが3.5%増加、ローバースカウトが3.3%増加でした。全事故（非加盟員を除く）に占めるスカウト全体では73.1%でした。一方、指導者の割合は26.9%と昨年より若干低下しました。

■ 部門別事故発生割合 (n=178)



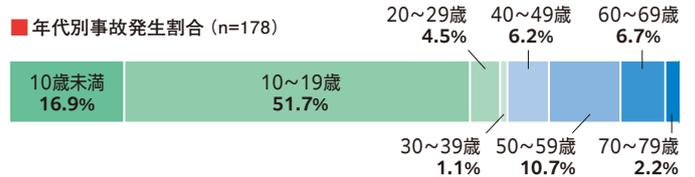
■ 指導者/スカウトの事故発生割合の変化



年代別

年代別では19歳までの割合が68.5%にあたる122人でした。20代8人、30代2人と少数ですが、40代11人、50代19人、60代12人を占めました。70代でも4人の事故報告がありました。

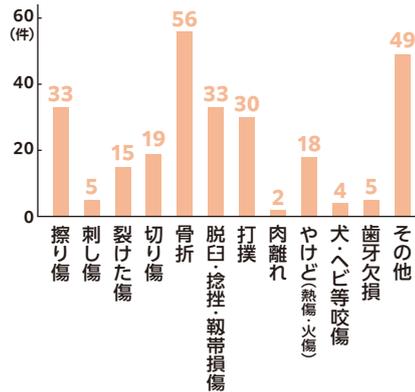
■ 年代別事故発生割合 (n=178)



傷病別（延べ数）

傷病別では「骨折」の割合が最も多く、昨年度より17件増加の56件で第1位でした。第2位は「擦り傷」と「脱臼・捻挫・靭帯損傷」で昨年度から増加の33件でした。第3位の「打撲」は昨年度の17件から13件増加の30件でした。これら4傷病で全傷病の56.5%を占めています。

■ 傷病別事故発生件数と事故割合（n=269）



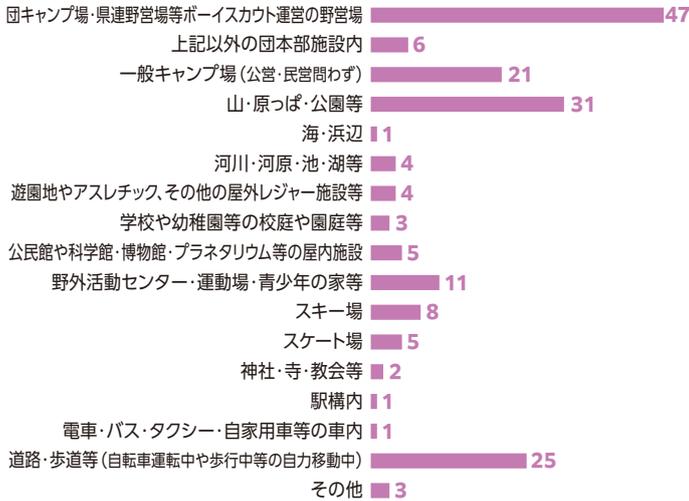
「その他」の項目はそのほとんどがマダニなどによる虫刺されです。事前の準備や適切な服装をすることで被害を減らすことができます。また「その他」の中には熱中症も見られます。活動が活発化することで熱中症のリスクが高まるのが懸念されます。

発生場所

事故の発生場所として最も多かったのは「団キャンプ場・県連盟野営場等ボーイスカウト運営の野営場」でした。ついで「山・原っぱ・公園等」です。COVID-19により活動が抑制されていましたが、活動が再開されることにより野外での事故発生が増加しています。

また移動中の事故も引き続き多く発生しています。移動中は大きな事故につながる可能性が高く、今一度安全に対する意識が必要です。

■ 生場所と発生件数



まとめ

共済事業に移行して8年目、COVID-19が流行してから2年目の事故分析となりました。例年と比較すると活動は縮小しましたが、前年度と比較すると活動数の増加に伴い事故発生件数も増加しています。受傷内容も重傷化の傾向にありますので今一度安全に対して高い意識を確認いただきたいと思います。分析において気になった点をまとめました。

第一に、各部門における傷病の上位に骨折や脱臼など重傷化しやすいものがあるということです。これらの傷は完治までに長い時間を要するとともに、日常生活における制限も多くなります。行動前に体を十分にほぐしておくことなど事前の準備を十分に行うことも有効と考えられます。

活動内容

ビーバー部門での事故1位は「準備・かたづけ」で3件、2位は「水遊び」で2件でした。指導者などが準備・かたづけをしている際に事故が発生しています。

カブ部門での事故1位は「ハイキング・ナイトハイク」で8件、2位は「ゲーム」「休憩中・自由時間等」「移動中」で各4件でした。ハイキングなど活発な活動の中で事故が発生しています。

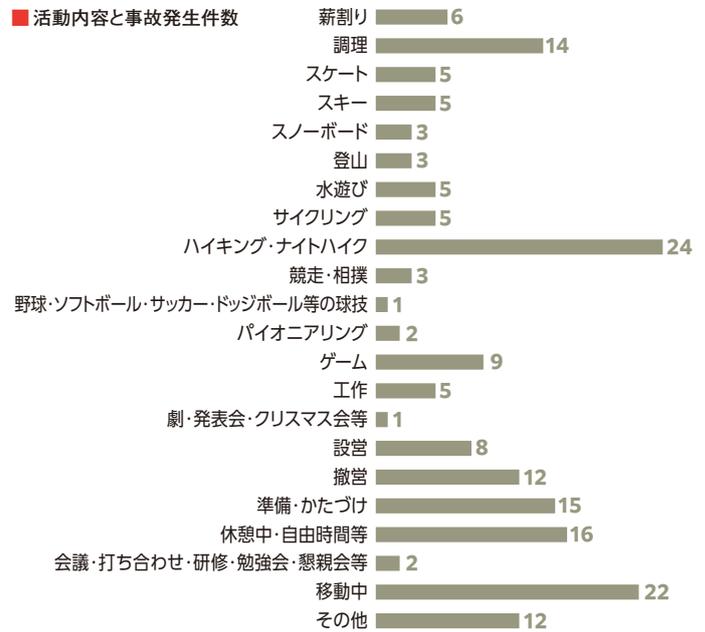
ボーイ部門での事故1位は「調理」「ハイキング・ナイトハイク」で各8件、2位は「休憩中・自由時間等」で6件でした。調理中の事故として熱湯による火傷が多くなっています。誤って倒してしまうなどの事故であり、周囲の整理整頓や作業時の声掛けなどで事故を減らすことも可能かと思えます。

ベンチャー部門での事故1位は「スノーボード」「ハイキング・ナイトハイク」「準備・かたづけ」で各2件でした。

ローバー部門での事故1位は「休憩中・自由時間等」「移動中」で各3件でした。

指導者の事故1位は「移動中」で8件、2位は「撤営」で5件でした。

■ 活動内容と事故発生件数



■ 部門別 最も事故が多かった活動内容

部門	最も事故が多かった活動内容	プログラム
ビーバースカウト	準備・かたづけ [3件]	
カブスカウト	ハイキング・ナイトハイク [8件]	
ボーイスカウト	調理/ハイキング・ナイトハイク [各8件]	
ベンチャースカウト	スノーボード/ハイキング・ナイトハイク/準備・かたづけ [各2件]	
ローバースカウト	休憩中・自由時間等/移動中 [各3件]	
指導者	移動中 [8件]	

第二に、マダニによる傷病が多く見られることです。マダニに咬まれることでダニ媒介感染症のリスクも高まります。マダニは春から秋にかけて活発に活動するといわれています。草むらや藪などに立ち入る場合、長袖長ズボンの着用、足を完全に覆う靴、帽子や手袋の着用など肌の露出を少なくすることが大切です。

最後に、移動中の事故がスカウト・指導者問わず多いことです。車道や歩道での事故は大きな怪我の可能性があり、周囲の方を巻き込む可能性があります。交通ルールの順守はもちろん、自転車のヘルメットなどの保護具の着用により、事故の発生を抑止と怪我の防止に努めましょう。

野外活動のための 安心・安全講座 3

SCOUTING

スカウティング誌掲載記事

[2021年5月号～2024年3月号 抜粋]

令和6年12月1日

発行  公益財団法人
ボーイスカウト日本連盟

〒167-0022 東京都杉並区下井草4-4-3

電話: 03-6913-6262(代表) ファックス: 03-6913-6263

e-mail: program@scout.or.jp
